

京都 だより Kyoto Dayori

かくやく
【特集】 赫奕たる村野藤吾の建築

建築家・建築史家 安達英俊

写真撮影／沼田俊之（広報編集委員会）

*肩書、所属等は掲載当時のものです

- 2014年 9月号 第1回 「綿業会館」
- 2014年11月号 第2回 「日本基督教団 南大阪教会」
- 2015年 1月号 第3回 「ドウトン／キャバレー・アカダマ」
- 2015年 3月号 第4回 「都ホテル」
- 2015年 5月号 第5回 「京都宝ヶ池プリンスホテル」
- 2015年 7月号 第6回 「輸出繊維会」
- 2015年 9月号 第7回 「カトリック宝塚教会」
- 2015年11月号 第8回 「大庄村役場」
- 2015年 1月号 第9回 「佐伯邸」
- 2015年 3月号 第10回 「近映レジャービルアポロ」
- 2015年 5月号 第11回 「梅田吸気塔」



KYOTO SOCIETY OF ARCHITECTS & BUILDING ENGINEERS

一般社団法人 京都府建築士会

<https://www.kyotofu-kenchikushikai.jp>

(一社) 京都府建築士会

外観・南西面

赫^{かく}奕^{やく}たる村野藤吾の建築 1



綿業会館

1931年 設計・渡邊節建築事務所／製図主任・村野藤吾

コロニアル風を加味した近世復興式(アメリカ・19世紀)

外観：アメリカの銀行建築等に用いられた「コロニアル・リヴァイヴァル」を加味したルネサンス系の様式。



外観・正面玄関

安達 英俊
建築家・建築史家

村野藤吾(1891〜1984)が没して、はや30年が経過する。関西に多くの名作を残した赫奕たる村野藤吾建築の足跡を辿りたい。村野がどのように都市と時代に向き合い建築を構築したのか、検証を試みる。

京都府建築士

クイーニンアン(イギリス・18世紀)

貴賓室



ジャコビアン(イギリス・17世紀)

談話室



談話室・階段



談話室・正面



貴賓室：優美、軽快で曲線が多く、家具では机脚や椅子脚はねこ脚で、その先端に玉をつかむ獣足も。

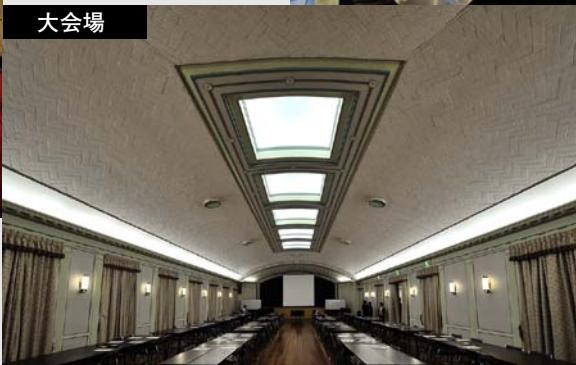
談話室：きわめて重厚に構成(暖炉上部、柱)されたものと、大胆な粗面仕上(大梁)で構成。壁面の装飾や家具にその特長がある。

食堂

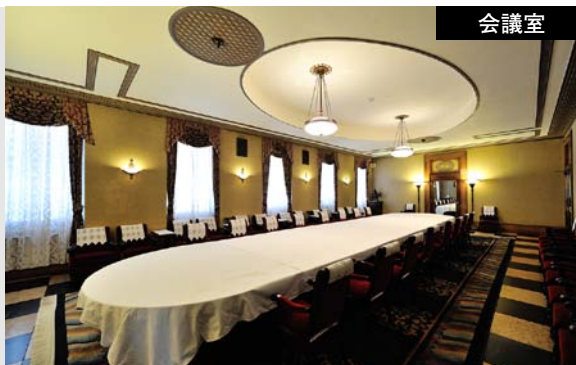


ミュラル・デコレーション
(アメリカ・19世紀)

大会場



会議室



アンピール(フランス・19世紀)

会議室・扉



食堂：梁の装飾は、直線、円、菱形、円弧等の形態、色彩が、モールディングで構成。

「ジョージアン・リヴァイヴァル」の室内意匠、同時に始まりつつあるアメリカの「アール・デコ」の影響もみられる。

大会場：新古典主義建築家アダム兄弟により確立された室内装飾様式。明るい彩色と精密な比例により、軽快で華麗な構成。

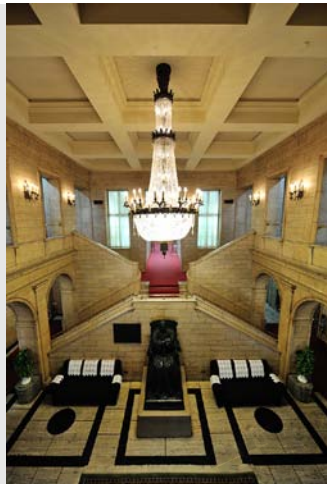
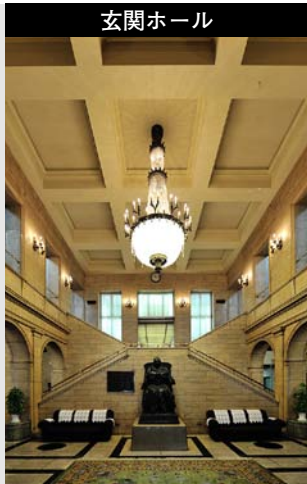
会議室：ナポレオン帝政時代の直線的で力強く端正な様式に、古代ローマの豪華で荘重な装飾を加味した新古典主義を再構成。

アダム スタイル
(イギリス・18世紀)

玄関ホール



玄関ホール
E Vホールより



イタリアンネッサンス系・
ネオ・ジョージアン
(アメリカ・19世紀)

玄関ホール
吹き抜け

玄関ホール：連続アーチはローマンアーチ、アーチ間に付柱、トスカナ風の柱頭。二階腰壁下に水平帯状飾が、優雅な比例でトラバーチンにて構成。

はじめに

建築家にとって、重要な作品が2点ある。「出発となる作品」と、「代表作」である。「綿業会館」は、渡邊節（1884～1967）にとっての「代表作」であり、村野藤吾にとっての「出発となる作品」である。

「2代目京都駅」（1914）は、渡邊節にとつての「出発となる作品」である。ウィーン・ゼセッションに彩られていたその建築は、1950年に焼失している。その脇に、モダニズムに纏われた「梅小路車庫」（1914）は今も残る。

初回は、村野が、「渡邊節の作品」と言説し続け、村野建築の原点となる、「綿業会館」（重要文化財・2003）とする。1929年、村野は渡邊建築事務所を辞する。数年前より村野から独立の打診を受けていた渡邊は、「綿業会館」の竣工まで見届けることを条件に承諾する。

建築家の師弟の関係は、今日には、想像できない程の非常に濃厚なるものである。

綿業会館の様式について

●外観

外観は、1階にルスカ風石積みアーチ窓があり、2階より上部はスクラッチタイルを張っている。全体にコロニアルスタイルを加味したネオ・ルネッサンス様式である。

窓周りには、「マツキム・ミード&ホワイト」の影響が窺える。基壇（ベース）、胴部（ボトム）、頂部（トップ）、に意匠をわけながら全体が一体となる優れた立面である。

西洋建築様式は19世紀から20世紀初頭にヨーロッパからアメリカに渡り、省略や変化したのである。これらを、目の当たりにみた、渡邊は、再度、日本風を加味して、「様式」を構築する。この集大成が、「綿業会館」である。

●内観

西側正面玄関の繊細なる曲線の鉄製二重扉を開けるとトスカナ風オーダーの列柱をもつイタリアン・ルネッサンス・スタイルの上品な吹き抜けの玄関ホールがあらわれる。

正面の像は、建設に功績のあった「岡常夫」である。

重厚なる正面階段を上がった左側に、『談話室』がある。圧巻となるこの内部は、渡邊と村野の共同によるものと推察される。

渡邊は、東側の「タイル・タビエストリ

」について、下記の様に記述する。

「内外部の設計を通じて一番苦労したのは談話室であって、あれくらい天井が高くすべてが堂々としている部屋はない。これも設計が一応おわってから、どうも談話室だけが気になり、費用もかかったがさらに一ヶ月の期間をもらい、設計を変更して二、三階を打ち抜くことを考案して出来上がったものである。タイルなどは京都の泰山という店が精魂をこめて焼いてくれたものを使い、一枚一枚全体のコンビネーションを考え助手を使わず私一人でこつこつと仕上げた。」（抜粋）

（綿業会館の設計と私

日本綿業倶楽部「月報」

1969年5月）

二、三階が、吹き抜けとなったことで、西側に階段を設置す

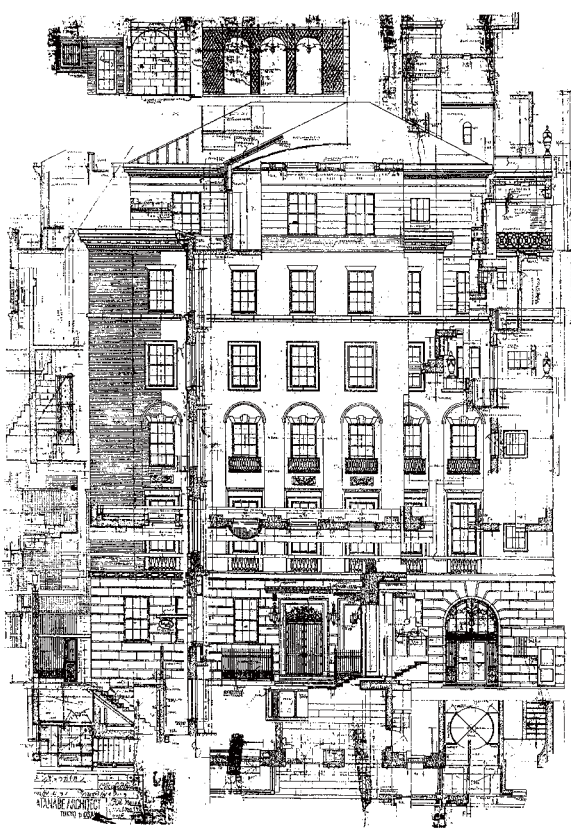
ることとなる。

私はこの階段こそ、村野の真骨頂ではないかという考えに至る。西側より南側にのびるアイアンワークの階段である。

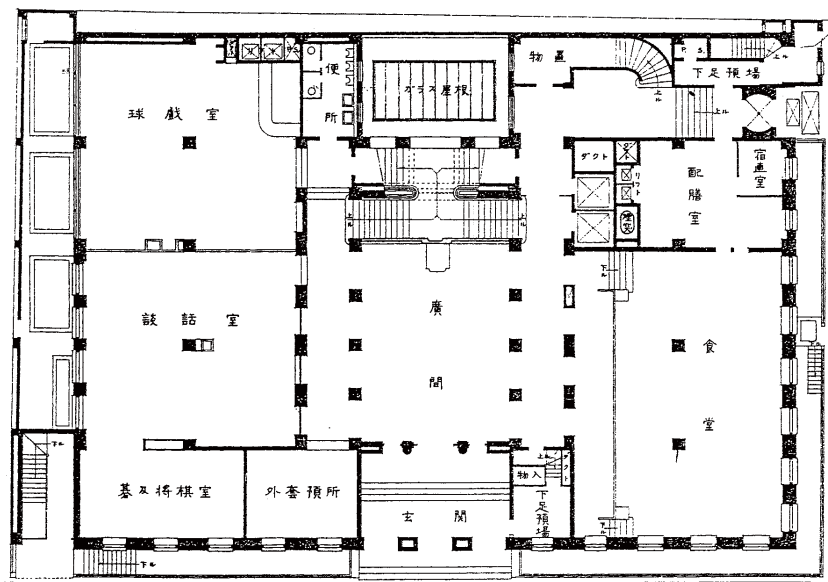
この場に幾度となく身をおくと、東側の「タイル・タビエストリ」との齟齬は否めない。手摺のオール・ヌーボー風のケースメントの意匠は魅力的である。

その後の、独立した村野の創り出す「階段」はこれを簡略化しモダンデザインを加味したものと筆者は考える。

村野は、亡くなる直前の1984年10月、



矩形図（個人蔵）



一階平面図（個人蔵）

狩野忠正との対談で次のように述べている。

「この建物（綿業会館）、コロニアルですよ。」「これをもって私がやめてから、そのうのスケッチ出来たんだ。それで（外国の建築家は）びっくりしていた。向こうの人たちはね、日本はそうじゃないですよ。様式はね、一つの教養課程として入っている。」（抜粋）

（HIROBA・1985—01月号

近畿建築士会協議会）

様式を自由に扱った渡邊は、次のように各室に意匠を施した。

〔談話室〕

・初期のジャコビアンスタイル

（イギリス・17世紀初頭）

東側の暖炉上部にクルミ材で格子状に垂直性のあるものが特長である。その左には、前記した「タイル・タピストリー」が、優雅に在る。

〔貴賓室〕

・クイーン・アン・スタイル

（イギリス・18世紀）

素晴らしい内部空間をもつ家具や照明、カーテン等が当時を醸し出す。

〔会議室〕

・アンピール・スタイル

（フランス・19世紀）

長辺の室内には、天井に楕円を中央に左右に円形2つの装飾が素晴らしい。各人口扉の上部はオニックスで飾られている。

〔大会場〕

・アダム・スタイル（イギリス・18世紀）

最上階の会場は、緩やかなる曲線の天井

が音を吸収して快適なる会場となる。

〔食堂〕

・ミューラル・デコレーション

（アメリカ・19世紀）

天井の装飾が特長であるが、陶器と金属（ナイフ、フォーク）の音を消すために、「セロテックスブロック」が壁面に施され、玄関ホール「トラバーチン」と呼応している。

多様な様式を散りばめている綿業会館。多くの会員が欧米をめぐり、ここでの様式に再度めぐり会うのである。

設計について

渡邊は、構造に内藤多伸（早稲田教授）、設備に北浦重之（東京大学教授）を擁している。耐震性や空調の将来性は、この二人の提案であろう。主任である村野は、自らの後継者として須藤員雄を育成していた。それまで多くの建築家が、縮尺1/20を多用していたが、1/50の図面とする。一葉に、平面図・断面図・立面図・矩形図・詳細図・建具図を1/50で構成している。パソコンのない時代、これにより施工者は、空間をよく理解するのである。2次元の図面は3次元となる（まるで、絵画のキュウビズムのように）。

様式を自由に扱う渡邊の許で教育をうけた村野は、「新しい建築」を次々と現出するのである。



食堂・北面：一段上がった客席の向こうに、透かし彫りのガラス窓がみえる。



談話室・北面：北面ガラスはフランス製網入ガラス（当時は、稀有）で、戦時下の延焼を免れる。



大会場・西面：ブラケットの両側に付柱が配されている。

（註）マッキム・ミード&ホワイト建築事務所／19世紀末～20世紀にニューヨークを拠点に活躍した3名の共同建築事務所。この事務所の作品集は渡邊建築事務所の教本とみられ、村野もこれを所蔵して検証していたようである。

●参考文献／・日本綿業倶楽部50年誌 ・「村野藤吾建築案内」(TOTO出版)2009

・村野藤吾建築設計図展カタログ1. (1999)23.24P ・HIROBA・1985.01月号 近畿建築士会協議会

※当時の建築名を使用し、すべて西暦表示とした。 ※人物の敬称は省略した。

※「日本綿業倶楽部」の皆さまに御協力を得た。

●写真撮影／沼田俊之



あだち・ひとし

安達英俊建築研究所主宰

一級建築士、工学修士

京都工芸繊維大学大学院修了（修士論文・近代建築の再構築に関する研究—渡邊節の建築を通して—）

元渡邊節建築事務所所員(1974～1979)

講師・委員／京都工芸繊維大学美術工芸資料館「村野藤吾の設計研究会」委員(1998～)

京都造形芸術大学非常勤講師

建築作品／ギャラリー「アーティスロンク」(1999)

著書／村野藤吾建築案内」(TOTO出版)2009（共著）



北側・非常階段：20世紀初頭、アメリカ高層ビルの非常階段を彷彿させる。

外 観
南側より塔と会堂を望む



赫^{かく}奕^{やく}たる村野藤吾の建築 2

日本基督教団 南大阪教会

1928・1981改修

安達 英俊
建築家・建築史家



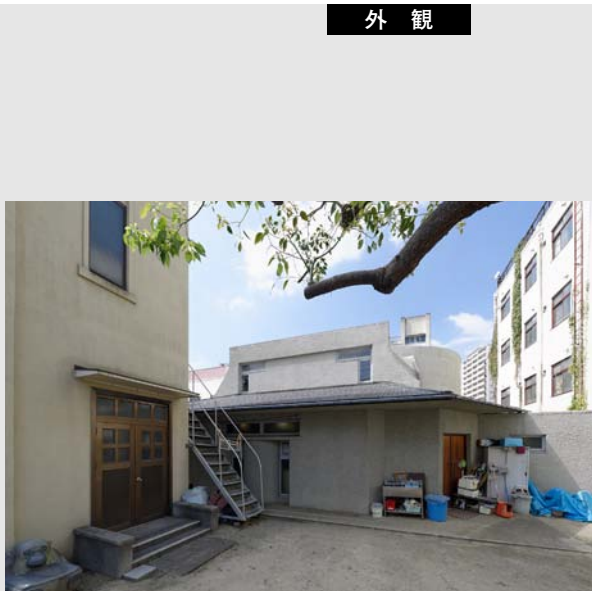
会堂内観
入口より祭壇をみる
天井に十字の模様がある

村野藤吾（1891〜1984）が没して、はや30年が経過する。関西に多くの名作を残した赫奕たる村野藤吾建築の足跡を辿りたい。村野がどのように都市と時代に向き合い建築を構築したのか、検証を試みる。

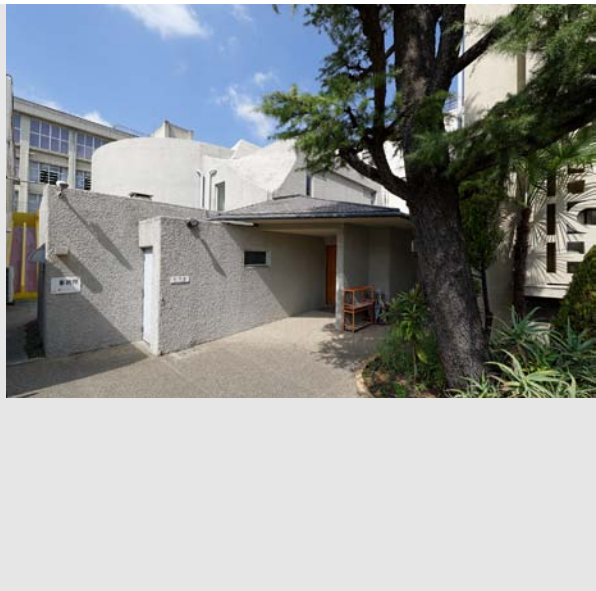
外 観



会堂南側壁面



会堂の東面、塔の北面を観る



塔の南より会堂へのアプローチ

会堂内観



トップサイドライト



南壁面



祭壇の上部見上げ

照 明



連続する曲面のコードペンダント

模 型



1928年の塔と会堂の模型

外 観



塔の足元、獣頭の吐水口

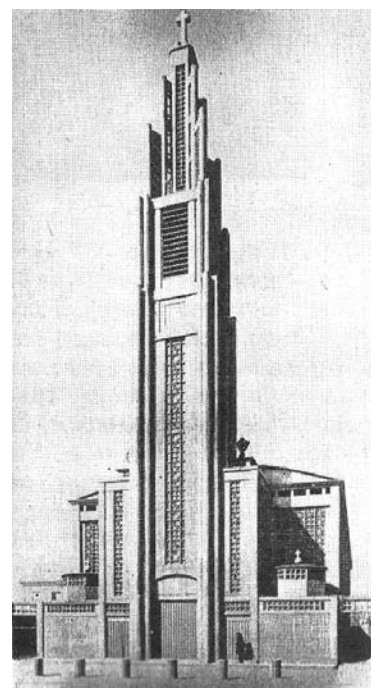
処女作・南大阪教会 ・1928年 (そして村野藤吾の独立)

南大阪教会に、いまでも旧会堂竣工時のブロンズ模型が残る。鉄筋コンクリート造3階建の塔と木造平屋建ての会堂を一体としたものである。このブロンズ製の模型をみると、会堂も鉄筋コンクリート造を意図していたと考えられる。

南大阪教会は1924年、大阪基督教会(1874)の50周年記念事業として設立された。その後1927年、住吉区天王寺村町2989番地(大阪府立阿倍野高等女学校東側)に土地を購入する。教会が面する庚申街道は、四天王寺から庚申堂を経て住吉大社に至る往來の多いものであった。周辺には良質な長屋と田畑が残る。東側には1925年、既に大阪市建築課の設計で大阪市立工芸高校が開校していた。ワイマールの工芸学校の建築意匠やカリキュラムを参考にした学舎からは、山城隆一、早川良雄らの大阪デザイン界の雄を多く輩出する。

記録によると、会堂の設計者は小守利兵衛氏の紹介により村野藤吾が選ばれた。1928年の会堂建設報告書には、次のように記述されている。「設計においては技術家村野藤吾氏に計りたるに同氏は吾教会に對する理解を持つて特に奉仕的の行為を持つて之にあたるべき快諾され茲に具体的進捗を見たり、即ち同氏は新開住宅地方の新会堂たることをと隣接建物の状態を考慮し之を予算の条件に鑑み、熱心研究の結果、本設計を完成せられたる。」

RC造の塔は約3mの正方形の平面をも



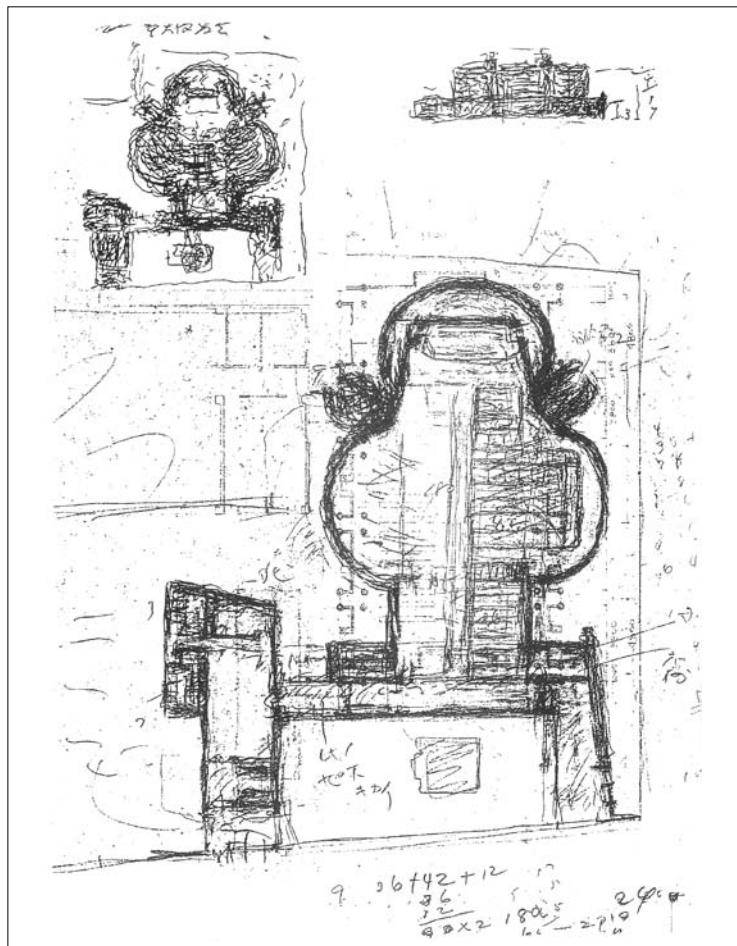
ランシーのノートル・ダム(世界建築全集・12)

ち、3層におよぶ十字型(十字架)と丸型(聖霊)を連続に繰り返して配した南側は、天への高揚感を与える。入口には、ブローケン・ペディメントを用いる。オーギヤスト・ペレ(1874-1954)のル・ランシーのノートルダム教会(1922-1923)を参照していると考ええる。

この建築は1923年創刊された、『Architecture Vivante』(現代建築)に発表されている。村野はこの時期に外遊していないから、この雑誌を参照したのではないかと推察される。アントニン・レイモンドの東京女子大学礼拝堂が同じデザインソースをもつが、1937年の竣工を考えれば、村野が如何に早く情報を入手し昇華し具現化しているかがわかる。

木造の会堂は敷地北側に位置し、東側より西の祭壇に向かう。緩やかな切妻の天井をもつこれは、寄棟屋根の構造を内部に表徴する。軒先はパラペットをたちあげ、木造風をあえて排除している。予算条件で、当時高価なるRC造を見送ったと推察できる。

この時期村野は渡邊建築事務所に在籍していたが、許可を得て個人的な仕事もしていたと、当時の渡邊建築事務所員が証言している。後日村野は、独立の経過を次のように記述している。



南大阪教会 平面スケッチ(建築と社会 1985.11)



南大阪教会 立面スケッチ(建築と社会 1985.11)

「渡邊事務所をやめたのはどうしてか」というと、これは別に野心があったわけでもなんでもなく、結局は時代の変化の自然な結果なのです。十五年もいますといういろいろな社会情勢がだんだんに変わり、それについて建築にたいする世の中の要請も変わってきます。様式的なものではこなせない条件が出てくる。(中略)このままでは先生にもいけない、自分にもマイナスになる。おれはここにはいないほうがよい・・・と悩んだあげく、非常に恩顧を受けた先生ですが、どうしても事務所を出ることになったのです。昭和十年ごろ、四十歳のときでした。」

(建築年鑑1965・展望)

「わたくしの建築観」村野藤吾
南大阪教会竣工年は、1928年であることは基礎や記録が証するが、前回の「綿業会館」の竣工年1931年との齟齬より、いくつかの村野作品集には1931年竣工の記録をみることがある。

会堂の改築(1981)

1980年頃に木造会堂の痛みが激しく、建替えのはなしが持ち上る。「いわば私の長男」と呼ぶほどに思い出の深い教会堂の改修に打ち込む。当時、90歳を超えた村野にとって、「宝塚市庁舎」や「新高輪プリンスホテル」等の大きな計画や現場のあつて忙しき時期と合致する。

1980年頃より、約1キロ北側の村野・森建築事務所にて多大のステディを繰り返して、粘土模型をいくつとなく制作している。半世紀前のことに想いを馳せて。

新会堂は、塔を解体するか、修復して残すのかは会堂建築委員会では議論された。

「旧会堂建設に当って苦勞された教会の先輩方の記念碑でもあり、また、南大阪教会の歴史でもあるので是非残したい。」と村野は発言したのである。そのことは没後、関係者が語り村野の当時のデザイン過程を「南大阪教会のスケッチプロセス」(建築と社会・1985・11)として記録されている。

塔を残した会堂は、当初は様々な案よりペアカラム(双柱)によるバシリカ形式の平面に収束するが、その後三つ葉型の平面を検討しはじめる。ラテン十字型平面と集中型平面の融合とみられるこの案は、バシリカ形式の平面図の上に幾重にもわたる曲線が描かれており、思考の過程を物語る。断面は東側にトップサイドライト、祭壇のある西側にも優美な楕円曲線の垂れ壁が、天光を受ける。内壁は幾重もの弧を持ち、コードペンダントのシェードと呼ぶ。天井には、木製に十字架の直線が施されている。手摺、幅木、建具、建具金物、照明器具等に特長のある村野意匠がみられる。特に照明(コードペンダント)は木漏れた光がアクリルを灯してうつくしい。外壁は大地から生えたように「日本ルーテル神学大学」(1969)を柔らかくした素材感をもつ。「建築周辺の環境を考えて、四隅に余地を残した。」という。建築に携わる者たちは肝にめいじたい言説であり、実行したいものである。

塔の概念はその後多くの作品に表れる。「キャバレー・アカタマ」(1932)の広告塔「大庄村役場」(1938)の階段室・塔屋と展開し、やがて戦後1953年の代表作のひとつ「世界平和記念聖堂」に至る。



塔東立面



塔玄関

阿倍野区出身の芥川賞受賞作家、阪田寛夫(1925〜2005)の作品「背教」には、次のように教会堂が表現されている。「菊の畠や、はねつるべのあるねぎ畠の間に建ち上がった灰色の壁の教会堂は、三層の塔があつて、しかもバタクさくはなく質朴で美しく、のちに美術全集に収められるような個性的な建物であつた。」

50余年の時間を経て、「阿倍野」という場所にひとりの建築家の一歩目の作品と、晩年の作品が対峙する風景がある。

今日、南陽光のもとに塔の足元、獣頭の吐水口が86年の永き月日を示唆する。いまもすっと建つ荘厳な塔は、生前の村野藤吾の起ち姿を説きに想起する。

「南大阪教会(1928-1981)についての試論-村野藤吾の五十年の変遷-」(村野藤吾建築設計図展カタログ・4/2002年)をもとに、大幅な加筆・修正をいたしました。建築名は当時のものを使用。年号は西暦で表示した。南大阪教会関係者の御協力を得た、お礼申し上げます。

- 参考文献／「南大阪教会(1928-1981)についての試論-村野藤吾の五十年の変遷-」(村野藤吾建築設計図展カタログ・4) 安達英俊 2002
「南大阪教会50年誌」日本基督教団南大阪教会 「南大阪教会70年誌」日本基督教団南大阪教会 1999 「背教」阪田寛夫 文藝春秋 1976
「建築と社会」1985.11 日本建築協会 「建築年鑑」1965 「世界建築全集」12」平凡社

●写真撮影／沼田俊之



あだち・ひろし

安達英俊建築研究所主宰

一級建築士、工学修士

京都工芸繊維大学大学院修了(修士論文・近代建築の再構築に関する研究-渡邊節の建築を通して-)

元渡邊節建築事務所所員(1974〜1979)

講師・委員／京都工芸繊維大学美術工芸資料館「村野藤吾の設計研究会」委員(1998〜)

京都造形芸術大学非常勤講師

建築作品／ギャラリー「アーティスロン」(1999)

著書／村野藤吾建築案内(TOTO出版)2009(共著)

「ドウトン」外観 北側ファサード
壁面後退により「建築」と「川」の関係性を明示。
惜しいのは、今の1階の店舗の扱いでは。

「ドウトン」内部 (1955)
(「建築と社会」1955.09月号)



赫^{かく}突^{やく}たる村野藤吾の建築 3

ドウトン／キャバレー・アカダマ

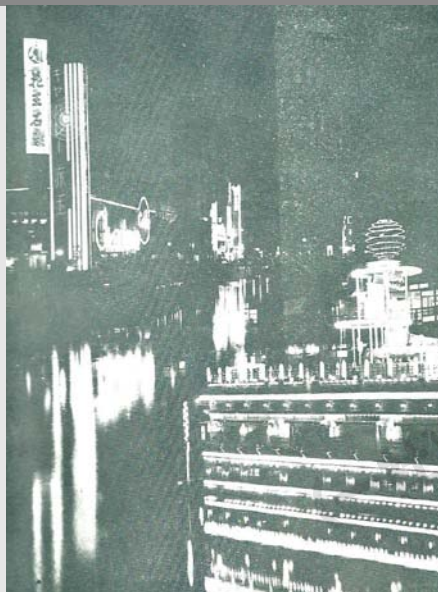
1955
(現：コムラードウトン)

1933 非現存

安達 英俊
建築家・建築史家



「アカダマ」道路側立面夜景 (1934) 〈写真2〉
(「近代建築画譜」より)



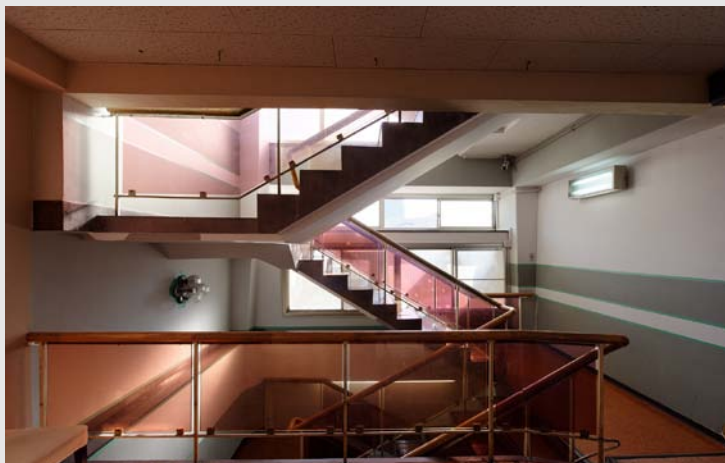
道頓堀夜景 (1934年頃) 〈写真1〉
(「近代建築画譜」より)

村野藤吾 (1891～1984) が没して、早30年が経過する。関西に多くの名作を残した、赫突たる村野藤吾建築作品を数回に分けてその足跡を辿りたい。村野がどのように都市と時代に向き合い建築を構築したのか、検証を試みる。

京都府建築士



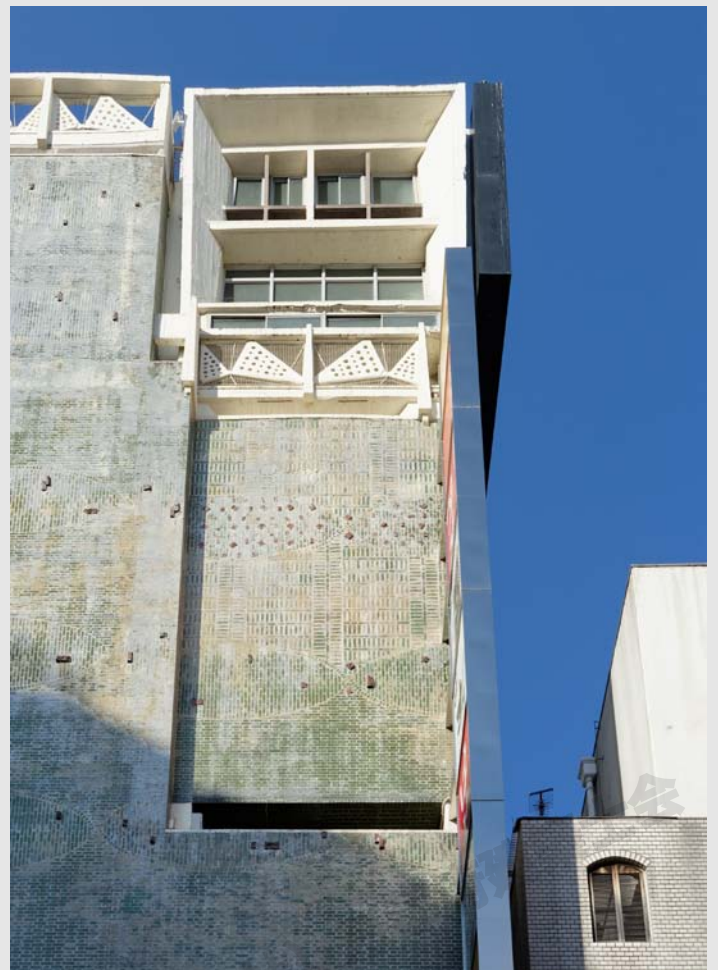
「ドウトン」南側立面



「ドウトン」南東階段



「ドウトン」屋上・背景に動かない「観覧車」



「ドウトン」南側壁面

キャバレー・アカダマ（1933）とロシア構成主義について

1933年12月大阪道頓堀に「キャバレー・アカダマ（赤玉）」が約3ヶ月の工期を経て出現する。この建築は木造既存建物の増築である。敷地は、北道頓堀川、南、食いだおれ横丁に挟まれた地、戎橋東側である。2階建て地下1階、塔屋付き、木造一部鉄筋コンクリート造である。

施主は興行師である榎本正で、同時期に彼は村野に「ダンスホール」「大阪メトロポリタンホテル」（共にアンビルド）の設計をも依頼していた。

当時大阪は「大大阪」と呼ばれ、好景気で商業施設の需要が増大していた。

赤い灯青い灯道頓堀の川面にあつまる恋の灯に
なんでカフエーが忘らりよか

（道頓堀行進曲）

日比繁二郎／詩・1928年）

暗闇に浮かぶネオンが道頓堀川に映る様を表現した流行歌もうまれた。ムーラン・ルージュを彷彿させるサイン塔が、川面にこの建築を映す写真が残る。（写真1）

大阪高速電気軌道1号線（現・大阪市営地下鉄／御堂筋線）は1933年5月に梅田駅（仮駅）～心斎橋駅間が開通し、1935年には梅田駅を開業し難波駅まで南下している。そして、幅員3間から24間（約43・7m）の拡張した御堂筋は大阪の大動脈となる。

商業施設設計の前に村野は1930年3月に出発、約4ヶ月かけて、ロシア、欧州、アメリカを調査、研修旅行している。第一の目的は「そこら百貨店」（1933）、「神戸大丸百貨店」（1936）の設計のために、欧米の百貨店の現状視察である。もうひとつの目的は1917年十月革命を成し遂げ

た社会主義国家ロシアの約10年後の建築視察と、「ロシア構成主義」と呼ばれた建築家たちとの面会である。「第三インターナショナル記念塔」（1920）を設計したヴラディミール・タトリンや、「シユブレマティスム」の画家カジミール・マレーヴィッチの作品をみると共に彼らと面会している。

「アカダマ」を当時の写真等資料により、追体験を試みる。

南側ファサードは西に、「キャバレー」内部に客を導くための「エントランス」を、ガラスブロックの量塊の壁を配し頂部の部分で東に水平に帯状に同じガラスブロックが構成されている。残る大壁面（24m×9m）はモザイクタイル貼りである。サインとして「Cabaret」・「Akadama」のネオン管がいつばいに施されている。明らかに夜を意図した「商業建築」である。（写真2）川側（北）ファサードは東に広告塔が聳え、垂直の12本の付柱（マリオン）がのびる。道頓堀川に開いた表情をみせる。カジミール・マレーヴィッチの作品の影響が想われる。

内部の構成は、客席とホール、ステージであり、「ダンスホール」に近いものである。この時代ダンスホールは条例により禁止されていた。

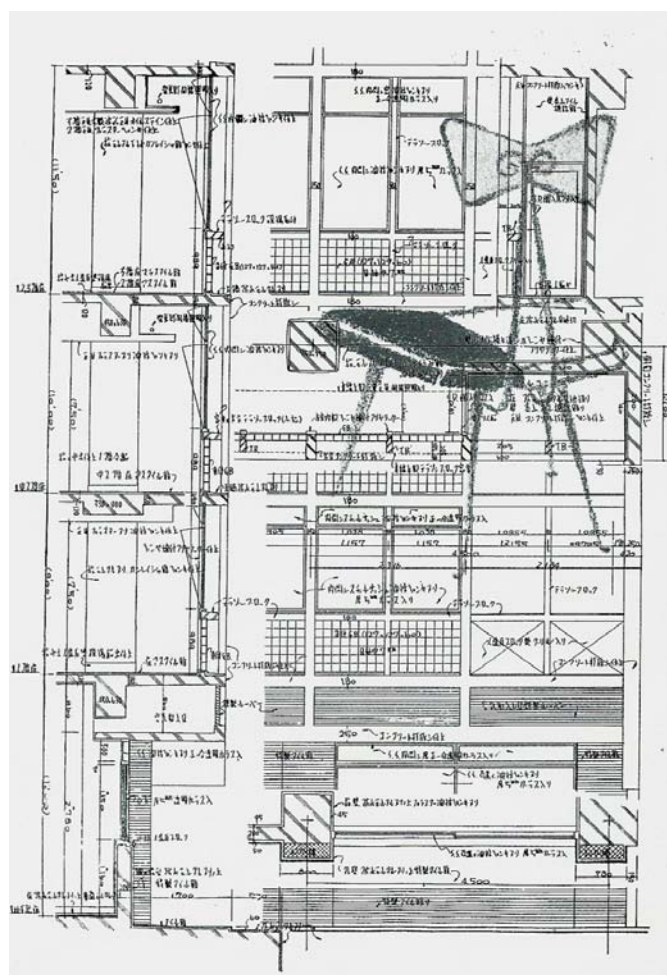
ホールの南側に9本の壁柱（1360mm×450mm）の間に客席が設けられ天井高5450mmのホールで、客同士、客と女給がダンスや飲食を楽しんだ。

川面に立面を落とすのは、日本建築の真髄、浄瑠璃寺と池、鹿苑寺と池、等に伺える手法でもある。「アカダマ」の建築スケールは川幅に見合って虚像を映し出していた。この虚像にこそ軍靴の足音に脅えながら日々を過ごす庶民に一時の安らぎを与えていたであろう。

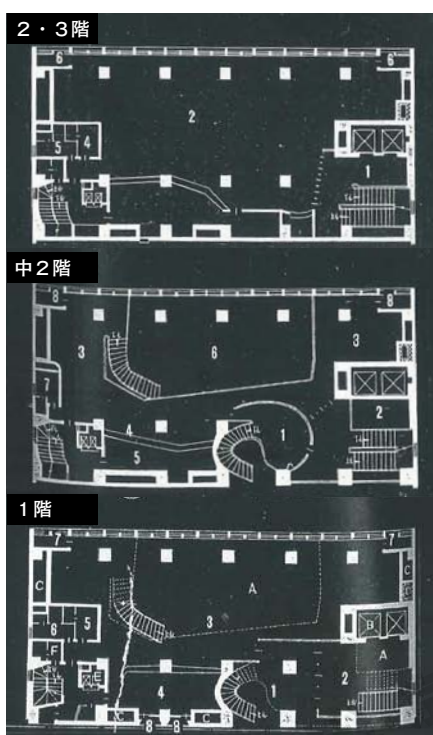
食堂ビル・ドウトン（1955）とその表徴

焼失した「キャバレー・アカダマ」の跡地に、全館飲食店舗、貸しビルという趣旨で計画された建築である。戦前、戦中、戦後の苦しい時代を経て22年後の再建である。

1期（3階まで）
1954・05～1955・05、2期（4～7階）1955・08～12と2期に別けられたのは、竣工を急いだ「商業建築」の証であろう。



「ドウトン」北側側面詳細図及び椅子スケッチ
（『建築と社会』1955.09月号）



「ドウトン」平面図
（『建築と社会』1955.09月号）

終戦10年後南側の通りには、道頓堀五座（松竹座、角座、浪花座、中座、朝日座）があり観劇後の賑わいをみせている。
南側立面について、村野は次のように語っている。

「ドウトン」は全壁面に貼り方の形を変えて使った見たが、これだけ大きな壁面だけにこれだけ高い調子のグリーンでもまだピンと来ないので、赤煉瓦の割ったのを肌のまま丸形に貼ったり、又転々と全壁面に散らばって貼り付けてみた。」

〔丸栄とドウトンの「壁面構成」〕

／「国際建築」1956・11号

村野は時間が許せば、呉服売り場にて着物柄を覗いたと仄聞する。

日本伝統着物柄「矢羽根文様」「水玉文」「七宝紋」をイメージしているようにみえる。この手法は、丸栄百貨店本館（1953）、東京丸物（現・池袋パルコ／1957）に展開する。特製タイル模様貼、一部泰山タイル、焼過レンガ、人造石塗叩きである。今日、嘗ての全容が望めないのは残念である。

北側ファサードは長方形の細いグリッドのカーテンウォールで施されている。川に開いたファサードは、今は整然と同じスケールで並ぶ各階サインが商業建築の証となる。川面にはネオンの様々な色彩は映るが、そのシルエットは確認できない。

オーナーに近い企業が経営した1階のインテリアは、2層吹き抜けとなり優雅なる螺旋階段を配置、北の川面と相まって船舶の室内を彷彿させる。これは渡邊建築事務所時代より続く大阪商船のインテリアの習作が影響していたと考える。特に戦前の大阪商船の「あるせんちな丸」（1939）の室内は秀逸である。また、リボンの背もたれのある椅子群は華やかさと軽みを与えている。

南面上部バルコニー、南東階段や、屋上の手摺には、竣工当時の姿をかいま覗くことができるが1フロア1店舗の姿を

取りながら時代の潮流を映し出し、変化の絶えることがない。かつての塔屋は今はなく、スカイラインは水平線となる。

建築の「虚」と「実」に関して

戦前の建築の「デザインソース」を保ちながら、その時代の要請にあわせ創られた。

「ドウトン」は「アカダマ」の表象を変化させ今がある。2つのファサードは「道」と「川」、「外部」と「内部」、「時」と「場所」、「実」と「虚」と2元的なる問題を人々にみせる。

特に、「実」と「虚」を考察してみよう。虚像を巧みに操作したベラスケスの名作「ラス・メニーナス（侍女たち）」（図1）がある。この絵画は画家が画中におり、モデルであるスペイン国王フェリペIV世、王妃マリアーナの視点にて描かれているのである。このことを示すのは画面奥にある「鏡」である。このことをミシェル・フーコーは「言葉と物—人文科学の考古学—」で次のように記述する。

「絵が表徴しているあらゆる表徴のうち、これだけが目に見えるものである。けれどもだれもそれを見つめていない。画布のかたわらに立ち、モデルに注意をこらしている画家は、彼の背後でしずかに光っているこの鏡を見ることができない。」

「絵の奥行きをよこさる、いくつもの線は不完全なままとどまる。それらのすべてに、行路の一部が欠けているからだ。このような欠落は王の不在—その不在こそ画家の設計であるのだが—のせいであろう。」

つまり画布に描かれた絵画は背景の「鏡」の内に虚像として存在する。ベラスケスを建築家（村野）として、この絵画自体を商業建築（ドウトン）、大衆を視線と考えると、

意味することに肉薄するのではと思う。

村野の「商業建築」に対するこの思いを語る資料がある。

「自分の建築家としてのテクニクでもって、相手の信頼を裏切ってはならない。その要求をいかに満たすか。私はまず一個の人間として受け止め、それから建築家として歩む。」

この場合、いちばん大切なことは、建築家として矛盾しないことはもちろんだが、場合によれば、自分を信頼してくれる人のために建築的生命をなげうってよいというくらいな、ぎりぎりの線まで表現をえることがある。

しかし、こうしてつくりあげた建築物も、できあがってから、必ずしも建築家の意図したとおりの使われ方をしていない場合が多いのは、毎度のことながら実に遺憾である。

私は商業的な指向について、建築をあまりに決別しすぎたと思う。しかし、建築はあくまで建築である。」

（世界建築全集・13・現代IV、村野藤吾談）

そこう百貨店（1933）1969）、「心斎橋プラザ」（1956）、「戎橋プラザ」（1965）は姿を消し、「ドウトン」はそのビルディングタイプゆえ半世紀以上たったいまも顕示する。

「大量生産」「大量消費」「大量破壊」される時代を表徴する、衣類、飲食関係の建築が建ち並ぶこのエリアは「虚」を「ゲーム」のように無限連鎖するののか。

それとも「建築はあくまで建築である」のか。



「ラス・メニーナス」ベラスケス作 <図1>

今回の論考は、村野藤吾建築設計図展カタログ11.(2012)『赫奕たる「都市建築」へ（その3）』（30.31頁）、村野藤吾建築案内(2009)121頁をもとに大幅に加筆修正しました。建築名は当時のものを使用、年号は西暦で表示した。「道頓堀土地建物株式会社」の関係者の御協力を得た。お礼申し上げます。

●参考文献／「近代建築画譜」（1936.近代建築画譜刊行会）「言葉と物」（ミッシェル・フーコー著・渡辺一民、佐々木明訳 1974、新潮社）「国際建築」1956.11（美術出版社）「建築と社会」1955.09（日本建築協会）「世界建築全集13」（平凡社）「村野藤吾—イメージと建築」（1991.新建築社）

●写真撮影／沼田俊之

※お詫び／前回「南大阪教会」記事で「キャバレー・アカダマ」（1932）と記載いたしました。1933年と訂正いたしてお詫びいたします



あだち ひろし

安達英俊建築研究所主宰

一級建築士、工学修士

京都工芸繊維大学大学院修了（修士論文・近代建築の再構築に関する研究—渡邊節の建築を通して—）

元渡邊節建築事務所所員（1974～1979）

講師・委員／京都工芸繊維大学美術工芸資料館「村野藤吾の設計研究会」委員（1998～）

京都造形芸術大学非常勤講師

建築作品／ギャラリー「アーティスロンク」（1999）

著書／村野藤吾建築案内（TOTO出版）2009（共著）

北西よりの全景
(軒底の折れ線とバルコニーの関係がわかる)



赫^{かく}奕^{やく}たる村野藤吾の建築 4

都ホテル

1936 ~ 1985
(現：ウェスティン都ホテル京都)

安達 英俊
建築家・建築史家



「客室・月の7」より佳水園の屋根を視る

村野藤吾(1891~1984)が没して、早30年が経過する。関西に多くの名作を残した、赫奕たる村野藤吾建築作品を数回に分けてその足跡を辿りたい。村野がどのように都市と時代に向き合い建築を構築したのか、検証を試みる。



佳水園の庭園よりの立面



東立面を視る、眼下に見えるのは岡崎周辺



佳水園の門、両側の柱のずれに注目すること



佳水園の玄関ロビー（天井の変化に特徴があり）



アプローチより玄関ホールを介して
中庭をみる



中庭を介して庭園を望む



西館のコロネード、照明のリズムに注目



西館の螺旋階段、手摺が美しい

「都ホテル」の歴史と 村野藤吾

明治23年（1890）油商、西村仁兵衛らが華頂山麓につくった保養遊園地「吉水園」が始まりであり、明治33年（1900）園内に「都ホテル」を開業している。

約半世紀（1936～1985）にわたる村野藤吾（1891～1984）は都ホテルに携わった。「都ホテル」設計に係わったのは1934年頃で、建築家・片岡安（1876～1946）の推挙であった。（大阪バッシン・1933年を視てのことであると仄聞する。）本館は片岡建築事務所で「近代建築画譜」にその記録は残る。その後を年表に概して纏めると、

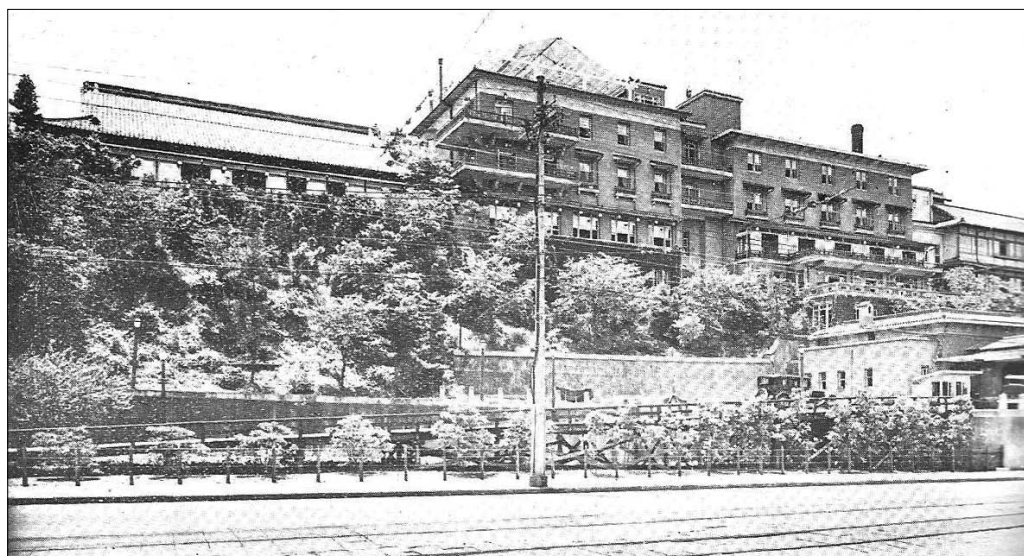
1936年／5号館（後の8号館）増築
1939年／宴会場（現・稔りの間）
1959年／新館10号館及び、
和風別館「佳水園」
1969年／新宴会場、南館・11号館増築
1985年／新館（現・西館）
2002年／「ウェスティン都ホテル京都」に改名

「都ホテル」全体について

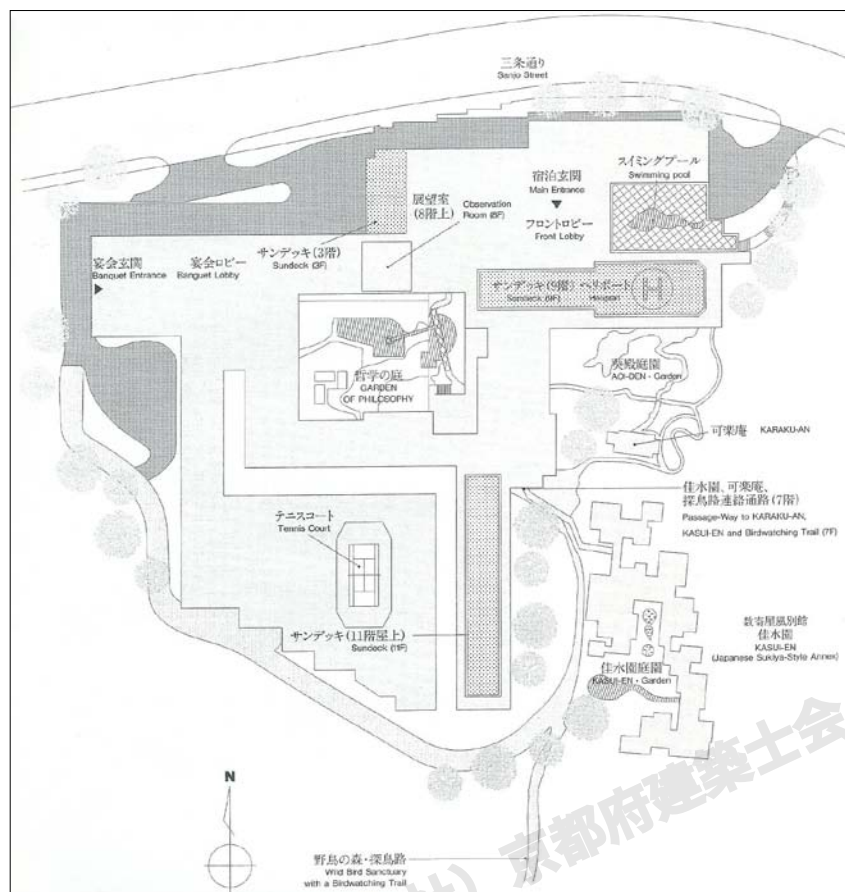
片岡建築事務所より始まる「都ホテル」の建築は村野藤吾に引き継がれ、今日はその手を離れている。山並み（華頂山）に這う様に増築、改築が繰り返され、景観への配慮を怠らなかった。

設計をはじめた村野は当時のことを次のように記述している。

優れた地的環境に建つ都ホテルは、それだけですでに他の追従を許さぬものがあるが、実際こんどの増築を終えて、つくづく



—「近代建築画譜」より—



配置図（「都ホテル・四季」より）

変化に富んだ地形と景観の美しさに今さらながら驚いている。しかしそれだけに、設計や実際の工事は決して容易ではなかった。まず外観の点では、すでに40年のへだたりにある旧館との調和をどう取り扱うのか、また増築部分は旧館の約3倍になんなんとするボリュームがあるので、これをどのように接続して不都合なきを得るや。しかも構造的には旧館とわずかに2～3尺をへだてて建てなければならぬが、地形はあたかも崖のようなところである。幸いに

地盤が非常に強固であったのでことなきを得たものの、それだけに設計や施工方法などについても非常に注意を払う、万全を期した。しかも営業中の工事であるため騒音は一切許されないし、のみならず工期は必ずしも充分とはいえず、工事関係者の苦心、焦慮は想像以上というような状態であった。

（村野藤吾・都ホテル100年史
P131・132）



昭和11年頃の模型

外観立面を覗てみよう。スタッコ仕上げに、殆んど同面の開口部その四周にはプレーンな施しが為されて微妙な変化をみせる。生命体が増殖するように「東山」に貼り付け建築ができたがっている。

西面は折りなす屋根の稜線、バルコニーによる深い影が美しさを醸し出す。

西館はコロネード、螺旋状の階段等、村野「建築言語」の集大成が読み取れる。

美術評論家・板垣鷺穂(1894-1966)は次の様に述べている。

壁の話がでたら、私はいつでも都ホテルをひきあいだすのです。昼間は、壁の色と外の緑との調和がじつにいい。夜は、宴会から帰ってきたときなど、部屋に入るとシーンと気がしずまる。

(国際建築1955・04号)

70余年の時の推移はこのような「時の移ろい」を、来訪者がもてるか今後の課題もみえてくる。

和風別館「佳水園」

「佳水園」(1959年)は数寄屋建築に和風モダンニズムを意図している。

20室(月9室、雪7室、花4室)のコの字の配置は緩やかに上昇して個室へアプローチを誘う。玄関アプローチ、廊下は、下足のままの洋式であり、客室の玄関にて履物から上足に変わる。旅館建築が廊下より上足が通例であるに對しホテルの様式である。

木造建築ではあるが随所に、鉄骨、コンクリートを使用して、その時代を反映している。軒桷の間隔は広く軒先のエッジは薄い。その事情を施工者が語る。

屋根の勾配がゆるくかつ薄く軒の出も深く1m200程ありますが、そのため極の断面も細く設計されてありました。何分高所であり、台風時にはひとまりもなく軒が吹飛んでしまいますので、先生に極の断面を大きくして下さいとお願ひしましたが聞き入れられず、断面が小さくとも丈夫なものを考えなさいとお叱りを受けました。

考えた末、極に背割をして鉄板(6ミリ×50ミリ)を仕込むことで解決し、先生に大変喜んでいただきました思い出があります。また箕甲部分も勿論鉄骨を併用し、先生の考えておられるような姿を実現することが出来ました。竣工して始めて屋根の姿を眺めまして、なるほどと感じ入った次第であります。

(追悼文集・村野先生と私/先生と突貫の記録(新大ビル、都ホテル、佳水園)

村野実(元大林組)1986年私家本
村野森建築事務所発行)

桂離宮の「御幸門」を模した入口檜皮葺の門は、右側門柱が少し前に出て客を招き入れるようで心地よい。

玄関アプローチの底にポツカリあいた孔は嘗て樹木の幹があった。そのような建設の前の風景についても村野は配慮を忘れていなかった。

全体は桂を意識しながら、高床ではなく大地に根だすように存在する。

「月の7」の客室は佳水園全体が見下ろせベストポジションと特に有名である。

この手法は村野の遺作となる「三養莊新館」(1988)に結実する。

庭について

宴会場「葵殿」の南に広がる回遊式庭園は7代目小川治兵衛(通称、植治・1860-1933)が作庭した。また1925年、小川治兵衛の長男小川白楊(1882-1926)の作である庭園を元に佳水園庭園は創られていた。

醍醐寺三寶院の庭を模した「瓢箪と杯」は季節や時刻を知らせ、変化する。南に山道をゆけば御百稲荷社を経て野鳥の森「深鳥路」へとつながり眼下に京の町が俯瞰できる。

村野は渡邊節の事務所在籍中「様式の上にあれ」を発表し、一様式を自由に操り尚それより自由に構築する」と語る。自らの創作の基は西洋様式にあるともいう。

「様式」について

スタイル

日本建築は独立前後の数寄屋人―泉岡宗助、中山悦治、中山半、中橋武一―から学ぶ。和風建築も基本的約束事から自由に発想するのを「数寄屋」と呼ぶなら、和式と洋式と二体化することも可能である。「都ホテル」の意匠の連続性はこのあたりであろう。

西澤文隆は堀口捨己についての記事のなかで村野藤吾の数寄屋建築を論じる。

村野先生の中でも都ホテルの佳水園とニユー・オータニの山茶花荘とを較べると前者の方が多少学究的で堅く、後者の方は天翔けるかの如く自由奔放。

(堀口捨己・SD1982・01号
P162 鹿島出版会)

哲学者大橋良介は「様式とは、時の凝固である。」と指摘する。

建築の様式は村野の手により「時の凝固」として風景に溶け合う。

- 参考文献／「都ホテル100年史」(株式会社 都ホテル発行・昭和64年) 「ひろば・2005.06号」・ウェスティン都ホテル京都、佳水園(福田晴虎)
「村野藤吾建築設計図展カタログ8」(京都工芸繊維大学・美術工芸資料館・村野藤吾の設計研究会・2006年)
「追悼文集・村野先生と私」先生と突貫の記録(新大ビル、都ホテル、佳水園) 村野実 1986年 私家本(村野森建築事務所発行)
「都ホテル・四季」(写真:水野克比古 都ホテル発行 平成6年) 「堀口捨己・SD1982.01号」P162(鹿島出版会)
「時はいつ美となるか」(大橋良介著 中公新書 1984) 「様式の上にあれ」村野藤吾「建築と社会」1919年5-8月号(日本建築協会)

●写真撮影/沼田俊之

「ウェスティン都ホテル京都」関係者の御協力を受けた、お礼を申し上げます。



あだち・ひろし

安達英俊建築研究所主宰

一級建築士、工学修士

京都工芸繊維大学大学院修了(修士論文・近代建築の再構築に関する研究-渡邊節の建築を通して-)

元渡邊節建築事務所所員(1974-1979)

講師・委員/京都工芸繊維大学美術工芸資料館「村野藤吾の設計研究会」委員(1998-)

京都造形芸術大学非常勤講師

建築作品/ギャラリー「アーティスロンク」(1999)

著書/村野藤吾建築案内(TOTO出版)2009(共著)

ホテル外観
連続アーチの手前は排気塔



赫^{かく}奕^{やく}たる村野藤吾の建築 5

京都宝ヶ池プリンスホテル

1986
(現：グランドプリンスホテル京都)

安達 英俊
建築家・建築史家



客室廊下より草木のある中庭を望む

村野藤吾（1891～1984）が没して、早30年が経過する。関西に多くの名作を残した、赫奕たる村野藤吾建築作品を数回に分けてその足跡を辿りたい。村野がどのように都市と時代に向き合い建築を構築したのか、検証を試みる。



エントランスロビー、左手にカーブを描くガラス越しの中庭



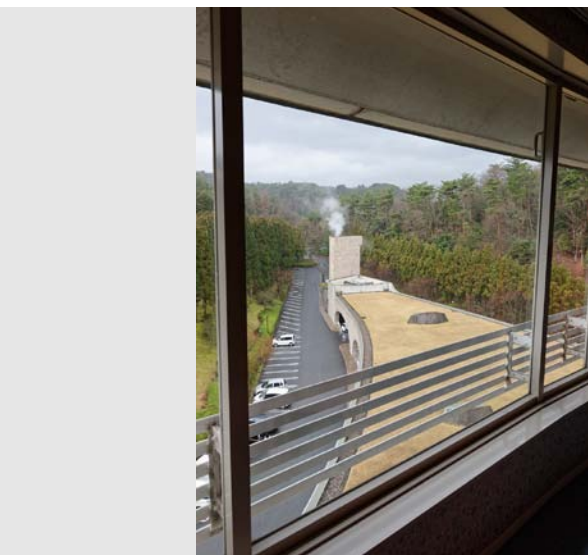
地階宴会場ロビーの吹き抜け、階段には籐のある手摺



「宝ヶ池スイートルーム」居間、キャビネットの下方に「梅紋」がみえる



地下宴会場クロック、入口廻り



客室より低層部を俯瞰する



排気塔、基壇の黒御影、外壁の砂岩の対比



豆型平面の階段塔のディテール

はじめに

「グランドプリンスホテル京都」は村野藤吾最晩年の作品のひとつである。

京都「宝ヶ池公園」の地「国立京都国際会館」（1966竣工）の隣に建つ。

宝ヶ池は江戸時代宝暦年間（1760頃）に農業用ため池としてつくられたものである。

公園法のもと、この計画・建設は進められ1986年「京都宝ヶ池プリンスホテル」として開業、その後2007年4月「グランドプリンスホテル京都」の名でリニューアルオープンして現在に至る。

計画について

この計画は村野藤吾の一枚のスケッチから始まる。

当初、監修としてこの計画に参加していた村野は「会議の最終段階で、一葉のスケッチを胸ポケットからおもむろに出した。」と、嫡男、故村野添（1936～2005）氏は語った。

竹中工務店の設計・施工ではまったこの計画は、堤義明（1934～）に幾つかの案が提出されたが、気にいらず村野に案をもとめたのである。

1986年日本開催予定の「第12回サミット」を京都に誘致するために計画され、工期の短いことが求められた。しかし「第12回サミット」は東京迎賓館で行われた。

建築について

敷地の形状に沿う様に、楕円形の客室棟、伸びやかな低層棟（玄関ホール、宴会棟）が相交じり一体となる。

建築沿いのアプローチは心地よい距離である。基壇部の砂岩が塗り込められた壁面、美しい楕円形の外観を眺めながら、左手には緑の並木がリズムカルである。連続するアーチを越えようとエントランスホールに導かれ、大いなる吹き抜けを介し、地下階には宴会場が配置されている。アーチの先には特有のフォルムをもつ排気塔が締める。楕円形の客室からは、四方に比叡山・東山等の美しい風景が愛で、竹林をはじめ草木ある内庭は、廊下を介して眺めることができる。長辺、短辺には、豆型平面のエレベーター・階段が変化を与える。「箱根プリンスホテル（現・ザ・プリンス箱根芦ノ湖）1978」の構成に類する。

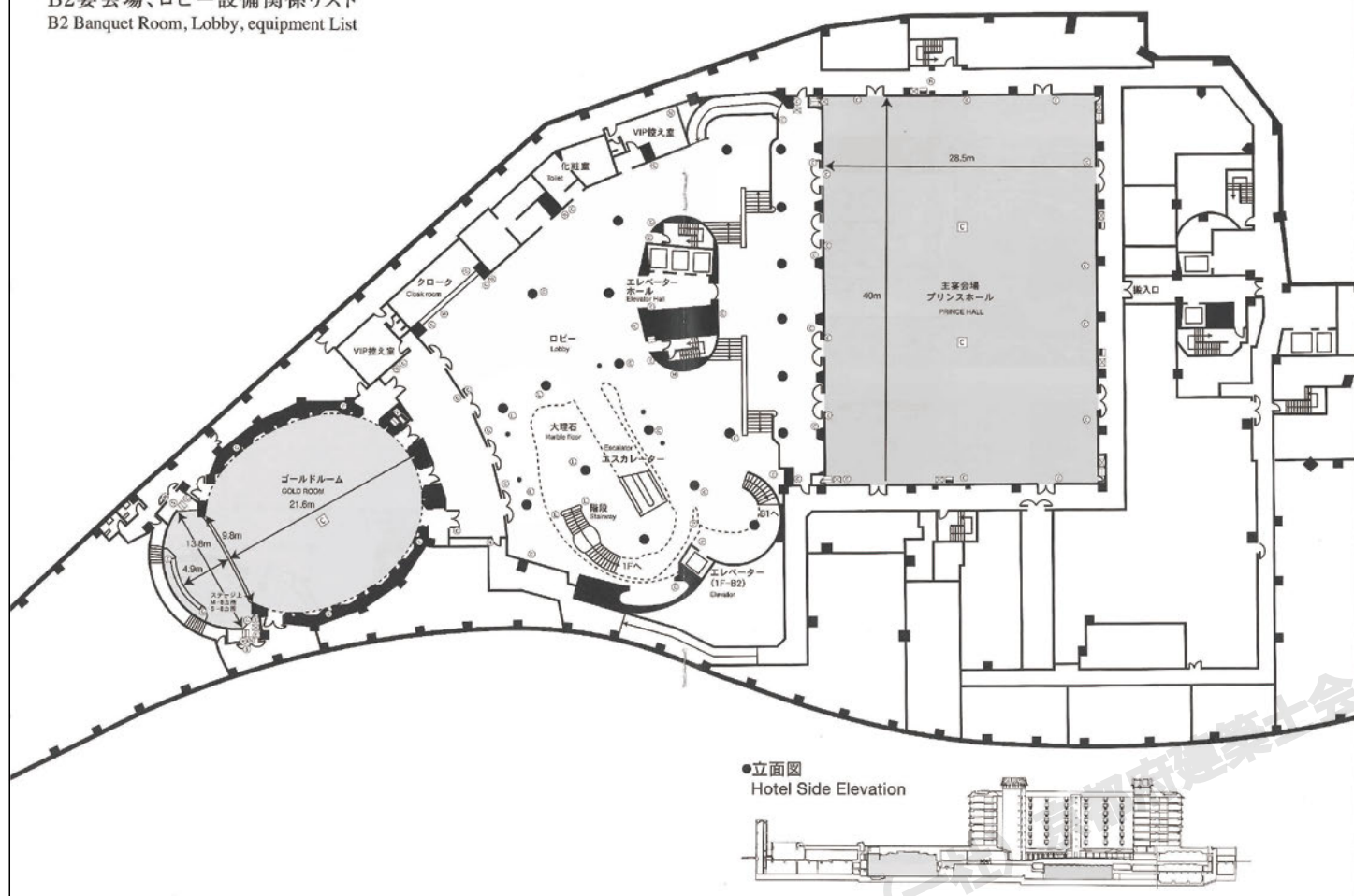
「宝ヶ池スイートルーム」には村野意匠の家具・調度が配され、「梅紋」（玉林院、霞床席の写し）の優美なキャビネットが落ち着きを醸し出す。椅子は座する状態にちかくするため低く施されている。

建築を生み出す

一つの建築を設計する者にとって二つの感動的な時が訪れる。

ひとつは、その敷地に立ち今後建ち上がるであろう建築を夢想する時である。

B2宴会場、ロビー設備関係リスト
B2 Banquet Room, Lobby, equipment List



もうひとつは、完成した建築を、施主のみならず社会に、引き渡す時である。

村野藤吾の孫にあたる村野永氏は、敷地を家族のみで訪問したことを次のように記述している。

1984年の2月頃、後に京都宝ヶ池プリンスホテルが建設される予定地を村野藤吾と村野様の二人が仕事上で関係のある人を一切連れずに訪れた時のスナップ写真である。(中略)雪化粧した冬の京都・宝ヶ池、そしてこれから建つだろう新しいホテルをイメージすることの方が魅力的だったに違いない。

「スナップ写真の向こう側―村野永」

(村野藤吾建築設計図展カタログ・7

2005年発行)

引き渡しの直前には、周辺を綺麗に掃除する村野の姿が関係者の目に触れている。だが1984年死去した村野藤吾は、完成された建築を清掃することは叶わなかった。

対としての建築

村野建築の特徴の一つに「対となる建築」の存在が挙げられる。

既に存在し隣接する建築に対してその外観をどのように意匠するのか。

嘗て丹下健三(1913～2005)の「旧・東京都庁舎」(1957)の隣に、「読売文化会館・そごう東京店」(1957)

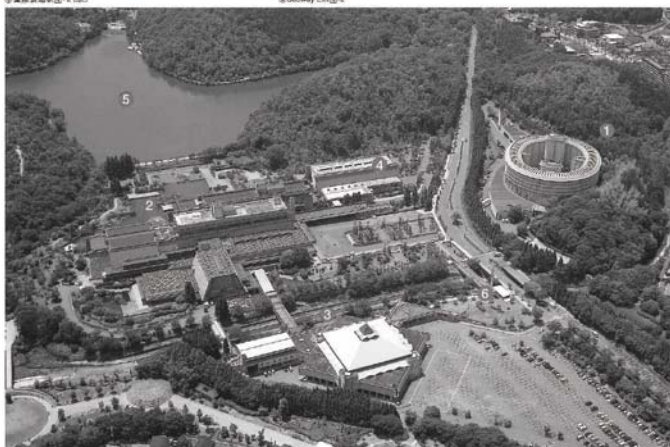
を建築している。当時の建築界は、この二つの建築の差異について議論になった。都庁舎は内部の機能がシステムティックに表徴に顕われているが、かたや、村野の建築は内部の機能と外部の表現が異なる。

丹下健三の弟子、大谷幸夫(1924～2013)の国立京都国際会館(1966)に隣接する公園に18年後計画した村野は、台形・逆台形の断面で構成され直線的な形態に対し、流れるような曲線で公園の風景に溶け込むことを意図した。

様式を多用して「場所性」と「時間性」という豊かな詩情を、京都・宝ヶ池の地に残した。

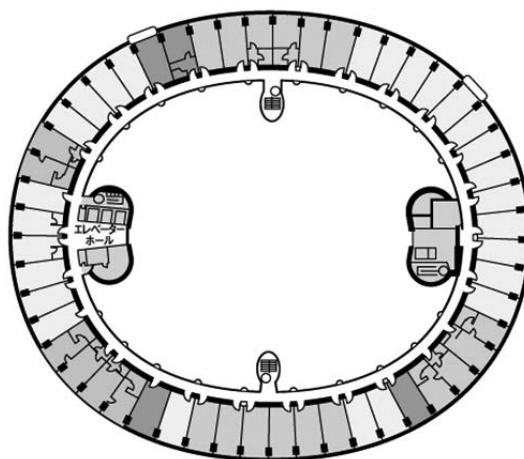
京都の洛北、宝ヶ池の国立京都国際会館に隣接したホテルです。
Sited next to Kyoto International Conference Center
in north Kyoto near Takaragaik Pond.

- | | |
|-------------------------------------|---|
| ① グランドプリンスホテル京都 | ② Grand Prince Hotel Kyoto |
| ③ 国立京都国際会館：毎年多くの国際会議、国内会議が開催されています。 | ④ Kyoto International Conference Center (Main Building) |
| ⑤ 国立京都国際会館イベントホール(1,000席・2,500名収容) | ⑥ Event Hall |
| ⑦ 国立京都国際会館アネックス | ⑧ Annex Hall |
| ⑨ 宝ヶ池：美しい自然に囲まれています。 | ⑩ Takaragaik Pond |
| ⑪ 国際会館駅(200) | ⑫ Skyway Exit⑪・⑫ |



Kyoto International Conference Center and Event Hall showing Grand Prince Hotel Kyoto and Takaragaik Pond.

航空写真(ホテルと国際会館と池の関係がわかる)
＜「グランドプリンスホテル京都」提供＞



客室階平面図
＜「グランドプリンスホテル京都」提供＞

- 参考文献／「村野藤吾建築案内」(TOTO出版・2009)
村野藤吾建築設計図展カタログ・7/2005
村野藤吾建築設計図展カタログ・9/2007

- 写真撮影／沼田俊之

謝辞：「グランドプリンスホテル京都」の関係者の御協力を得た。お礼を申し上げます。



あだち・ひでとし

安達英俊建築研究所主宰

一級建築士、工学修士

京都工芸繊維大学大学院修了(修士論文・近代建築の再構築に関する研究―渡邊節の建築を通して―)

元渡邊節建築事務所所員(1974～1979)

委員／京都工芸繊維大学美術工芸資料館「村野藤吾の設計研究会」委員(1998～)

建築作品／ギャラリー「アーティスロンク」(1999)

著書／「村野藤吾建築案内」(TOTO出版)2009(共著)

外観
南西角より臨む 塔屋にマストが見える



かくやく
赫奕たる村野藤吾の建築 6

輸出繊維会館

1960

安達 英俊
建築家・建築史家



中地階より南玄関廻りの階段をみる
華麗なガラスモザイクタイルと優雅な曲線をもつ階段

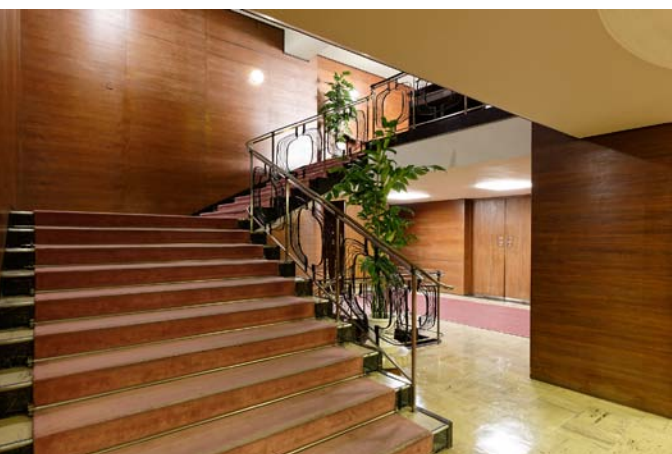
村野藤吾（1891～1984）が没して、早30年が経過する。関西に多くの名作を残した、赫奕たる村野藤吾建築作品を数回に分けてその足跡を辿りたい。村野がどのように都市と時代に向き合い建築を構築したのか、検証を試みる。



西側玄関：キャノピー（庇）のある風除室と外観



中地階の待合ロビー：波打つ壁面と村野意匠の家具、衝立



西側階段：中地階より1階を見あげる



前室のインテリア：正面に、堂本印象作の綴錦



大ホールの内観：正面に待合ロビーに繋がる扉



屋上の日除けの鉄骨フレーム



2階・EVホールより南玄関をのぞむ
会議室内観：下がり天井が、地盤面

楽士会

建築の諸元

輸出繊維会館は1960年（昭和35）繊維貿易商社の各組合事務機能を集約する共同施設としてつくられた。敷地は大阪の繊維問屋街の一画、心斎橋筋、備後町通に面する南西角地である。この場所には1939年（昭和14）に設定された「船場建築線」という制度があった。設計は村野・森建築事務所、大阪建築事務所の共同設計、施工は戸田組（現・戸田建設）である。

用途として、大ホール、会議室及び前室等の附室で構成された部分と貸事務室並びに付属する諸室とで成り立っている。

構造は鉄骨鉄筋コンクリート造で、柱、梁の断面を小さくするため高張力鋼を採用している。また、四階以上の部分は軽量コンクリートを使用している。当時、高張力鋼をビル建築に採用した我が国初めてのものである。

設備について貸室と会館に用途が分かれているため、空調調和設備は専用冷凍機に変速モーターを使用（会館部）、高速ダクト及びウェザーマスター方式（貸室部）を併用している。

建築のプログラム

もつとも重要な大ホール、前室、会議室等は1階を吹抜いて中地階に配置されています。これはエレベーターを使わず、専用の西玄関より容易に出入りできるためであり、また前面通路幅による高さの制限内を8階建にし、必要な事務室を収容するため、

1階に天井の高い室をとることができないためでもあります。これらの部屋はすべて1階の外壁に窓を設けず、道路よりの見透と騒音を防ぐようになっています。

（「建築と社会」1961・04

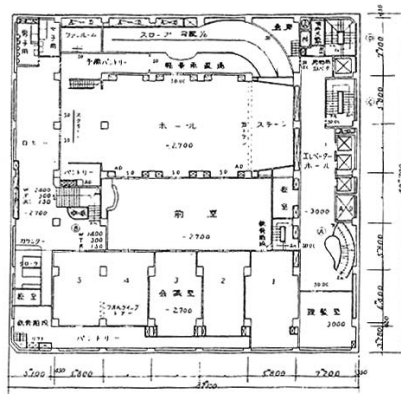
設計者のことばより）

前記説明で解かるように、この建築の特長は、西玄関から階段を降り、中地階待合ロビー、前室に到る空間にある。B・M・フラーのドームを想わせるアルミ折板の庇（キャノピー）は、繊細で折り紙が漂うようである。玄関直ぐに、蘭玉をモチーフにした優美な手摺のある階段。壁面は枋の練付け合板仕上げで、柱型を包み込み柔らかな曲線を描く。低い天井は一部を円型に上げ、同じく円形の照明器具を一体化した意匠である。「船舶」の内装を彷彿させる。

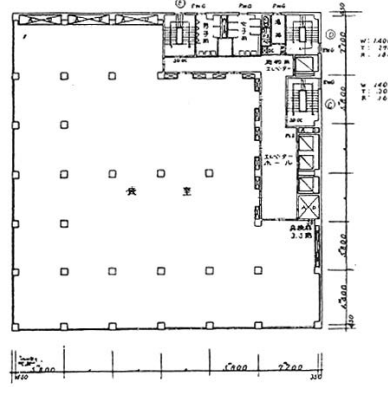
南側玄関は貸室専用であり、エントランスを入ると、優雅に曲線を描く階段、両側の壁面は、「深海」をイメージした輝くガラスモザイクタイルが迎える。これは村野の同時代の画家、堂本印象（1891〜1975）の原案をもとに施工されている。床はテラゾー仕上げ（真鍮目地）、今日では見かけない施工である。

隣地に接する北・東側には、階段、エレベーター、便所、給湯室のコアを配している。

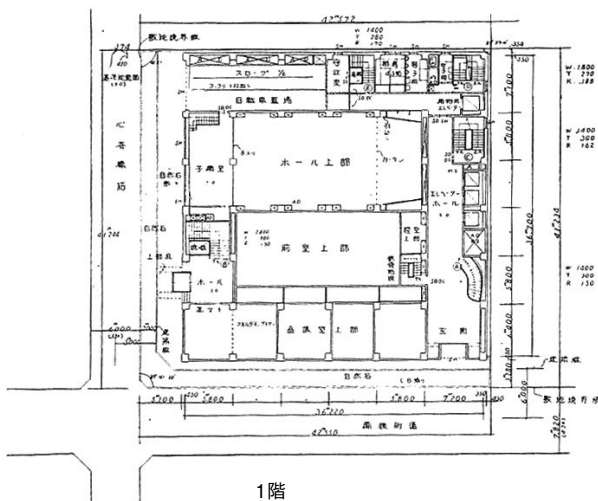
南・西側の外壁はイタリア産トラバーチンで、船舶の窓を想わせる、アールのコーナーのステンレスサッシュがリズムカルに並ぶ。上部嵌め殺し、下部気密性の高い引違い、ガラスは防音、防熱のためアンチサ



中地階



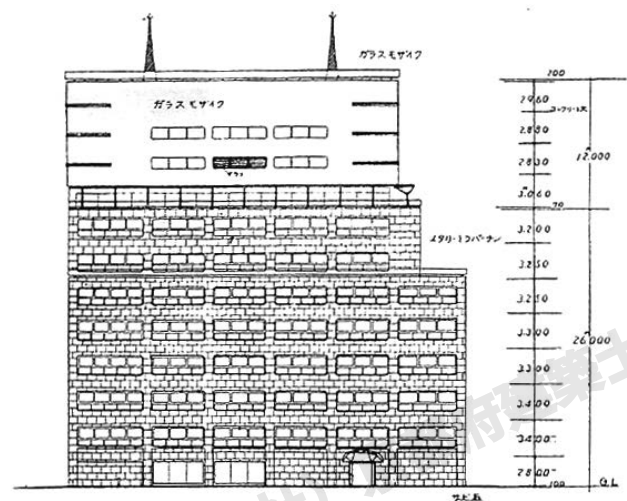
基準階



1階

配置図・平面図

＜「建築と社会」1961年3月号より＞



西側立面図

＜「建築と社会」1961年3月号より＞

ンガラス（ブルーベン）と透明ガラスの二重ガラスを採用している。外壁とは僅かな目地とちりを持ち、同面ながら微かな陰影を醸し出している。

1～6階は同面であり、道路斜線により7・8階は南・西面を後退させている。トラバーチンという同材でありながら、柱型と外壁が僅かにズレており、重要な外壁コーナーは、ある高さまで面取りを施している。足元は石材の色彩を変え、入り幅木として開口部のない壁と、植栽等の一切ない床が、建築を大地（大海）から浮遊しているように感じさせる。

前室には多くの会員が集まり、憩い、大ホールと4つの会議室と繋がる。壁面には、同じく堂本画伯の原案を、瀧村商工製作の絹製綴錦が張りつめられている。大海に浮かぶ帆船、その上部には虹が配されている。

大ホールは待合ロビーと前室から導入され、最大、約300人収容できる。舞台は設営が可動であり、仕切りの幕も壁面に収納され、シンプルな様相をみせる。会議室は30名及び60名収容で、一部、天井が低くなっていることで地盤面のレベルを確認できる。内装はウォールナットの練付け合板である。椅子やテーブルは村野デザインの低い家具、水のしずくを想わせる華蓋（かがい）の照明器具や、真鍮と透明アクリルの建具引手など、60年代を示す意匠で満ちている。

塔屋の外壁は当初、紫色の濃淡のあるガラスモザイクタイル貼であった。これは、遠目には友禅の織物のようにみえた。しかし今日、シルバーのアルミパネルに変更されている。

船舶という暗喩

―船場の地を大海に見立て、航行する船舶をイメージする―そのように、私には観える。

戦前の村野作品である義装―あるぜんちな丸（1938）ぶら志る丸（1939）の作品―を全体に散りばめている。塔屋上部に輝く2本のマスト（避雷針の機能）、甲板の手摺を想わせる、日除けの鉄骨フレームは道路から見上げても確認できるのである。

船というのはご承知のとおり、いきなり部屋の中へとび込むでしょう。建物だとその前に重いものの中を通って行くのだから、部屋の中へゆくと部屋という感じがするでしょう。船は、われわれの感覚にくるものは薄くて丈夫な鉄みたいなもの、それからまわりがガラガラしているし、光線が明るいでしょう。天井が低くて・・・つまり広さのわりに天井が低い。はじめは非常にやりにくいんだ。馴れてくるとだんだん調子が取れるようになったんですけれども・・・。

〔「国際建築」1955年4月号

板垣鷹穂との対談より〕

船舶という暗喩が、外部、内部をとおして読み取れるのである。

対の建築

「対となる建築」は、30年前に自らも参



会議室の扉引手

画した「綿業会館」（2014・09参照）であろう。

この30年間は日本社会にとって苦難の時代である。戦前、戦中の15年間、戦後復興の15年間である。

2つの建築は用途が類似する。竣工の2年後には、1931年の本館「会館」、1962年の新館「貸事務室」を綿業会館はもつのである。

2作品は、僅か200mしか離れていない。さまざまな様式を駆使し、華麗なる装飾を鏤めた「綿業会館」に対して、モダンズムの「様」を魅せながら、日本の繊維と西洋の繊維の美の表徴を素材と色に求め、貿易という絶え間ない交流を具現化した。

村野建築の多くが、解体、消去されつつある今日、解体されないものの重要な家具、照明器具、調度品が変更されているのが現実である。しかしこの建築は、半世紀以上経った今日も竣工時のそれらを維持管理して、「村野建築の全体像」をわれわれの眼前に魅せる。



塔屋の上部のマスト・避雷針

●参考文献／「輸出繊維会館ご案内」株式会社輸出繊維会館発行パンフレット
「建築と社会」1961年3月号 日本建築協会 「村野藤吾1928-1963」新建築社1983年
「国際建築」―建築美を探る八章― 板垣鷹穂と村野藤吾の対談 1955年（昭和30）4月号
「村野藤吾建築設計図展カタログ・6」
「村野藤吾のファサードデザイン―図面資料に見るその世界―」国書刊行会2013年
「綿業会館（本館・新館）」安達英俊 「建築と社会」2012年7月号

●写真撮影／沼田俊之

謝辞：「輸出繊維会館」の関係者の御協力を受けました。お礼を申し上げます。



あだち・ひでとし

安達英俊建築研究所主宰

一級建築士、工学修士

京都工芸繊維大学大学院修了（修士論文・近代建築の再構築に関する研究―渡邊節の建築を通して―）

元渡邊節建築事務所所員（1974～1979）

委員／京都工芸繊維大学美術工芸資料館「村野藤吾の設計研究会」委員（1998～）

建築作品／ギャラリー「アーティスロンク」（1999）

著書／「村野藤吾建築案内」（TOTO出版）2009（共著）

外観
東側の粗い壁面
「鯨」と隠喩した屋根の造形、左手に駅に向かう阪急電車



赫^{かく}奕^{やく}たる村野藤吾の建築 7

カトリック宝塚教会

1965

安達 英俊
建築家・建築史家



内観
中2階より整然と並ぶ椅子群を介して祭壇を望む
左側内壁は高窓を配し、防音・音響に配慮している

村野藤吾（1891～1984）が没して、早30年が経過する。関西に多くの名作を残した、赫奕たる村野藤吾建築作品を数回に分けてその足跡を辿りたい。村野がどのように都市と時代に向き合い建築を構築したのか、検証を試みる。



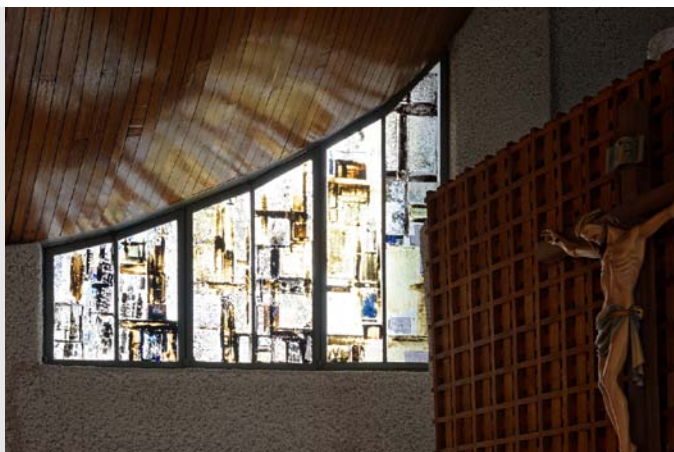
正面ファサード
左側が聖堂入口、右側ニッチではマリア像が迎える



北西より銅板葺屋根の造形を臨む
尖塔の形態にも感動する



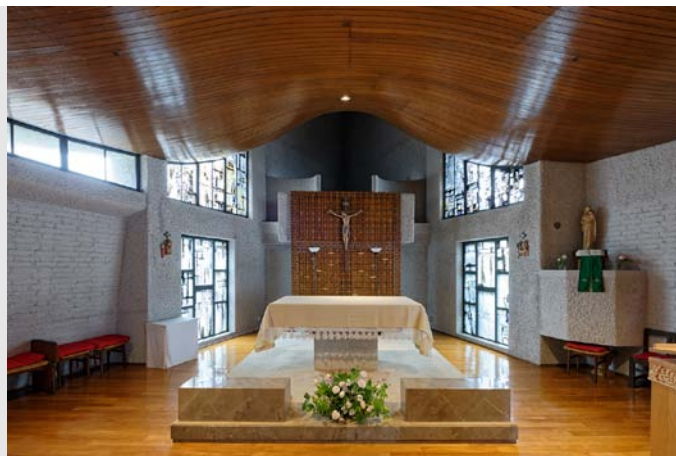
聖堂入口扉と2階の半円形開口部
右側ニッチにはマリア像が優しく見守る



ラワンの格子面を背景としたキリスト像とステンドグラス
波打つ天井面に映る色ガラスからの変化する光が、荘厳、優美である



中2階の半円形の開口部と1階への階段
単純化された美しい線状の手摺



祭壇を介してキリスト像を望む
天井の曲線は奥で昇華する



香部屋、尖塔の見上げ
白ラワンの天井は上昇し
菱形の開口部から光が降り注ぐ



南側の尖塔部
エッジの効いた線は
十字架を経由して天へと延びる



都府建築士会

大地は盛り上がり壁面となる
「はえ」ているように建築が存在する
孔は雨水の落ち口である

建築の諸元

カトリック宝塚教会は1965年（昭和40）、阪急今津線、線路沿いにある三角形の敷地に建設された。教会設立より5年後の竣工である。村野に課せられた予算は厳しく、施工を請け負った聖和建設が最大限の協力を施したと述べている。

鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造（屋根）、平屋建、一部2階である。設計及び監理は1962年初春から1965年12月の竣工まで4年の歳月を要している。

田口司教様より聖堂の設計の御依頼を受けて以来、今日迄四年にわたる長い歳月が流れました。

「教会創立25年の歩み」1985年・宝塚カトリック教会

建築のプログラム

ご希望の鯨のような皆様の教会堂がやっと完成いたしました。大洋を漂いつづけていた白鯨がようやく安住の地をみつければ、打寄せられたとでも申しませうか。末長く皆様方につくしまれ、愛されますことを祈る次第であります。

「教会創立25年の歩み」1985年・宝塚カトリック教会

と全体のイメージを述べている。限られた予算のなかで幾つかの案を検討して、その都度に粘土模型を製作し、その数は5個に及ぶと記述している。その設計過程で多くのスケッチが残っている。（図1）

敷地に合わせ三角形の平面、北側よりアプローチ、北東の壁面のずれた部分より進入する。線路側の東面は防音に配慮した二重壁で、内側に緩やかな傾斜のある壁面で水平スリット高窓を配している。

南西面は音響、光を配慮して壁面をずらし垂直スリットのガラス面を用いている。外壁は色モルタル荒引き粗面仕上げである。

建物が地面に建っているというより「はえ」ているようにしたいと思った。土と建物とのつながりに軟かさや無抵抗さがあらわれ、土と建物とが一体となって自然さをあらわせないものかと思って試みたが未熟で、そんなもので宗教的な気持、人の信仰の対象になるようなものを充分にあらわせたかどうか、心もとないと思う。

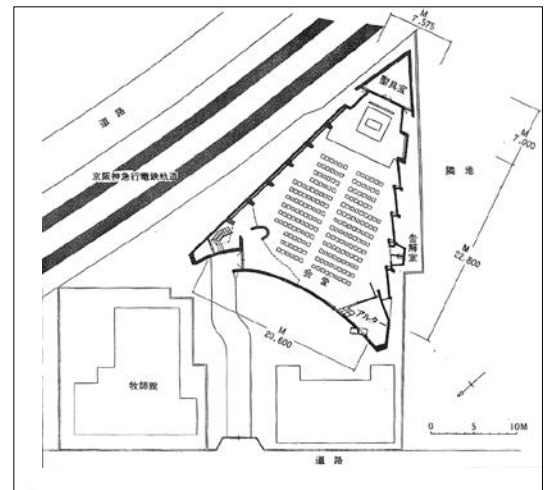
「建築と社会」1967年2月号

内部は、床、200角クリンカータイル、壁、色モルタルかき落とし及びタイル幅広目地、天井、白ラワン小幅板打上げ色付ラッカー仕上である。250余の椅子は200角磁器タイルの4枚の内に収まり、その基準で整然と並べることができる。

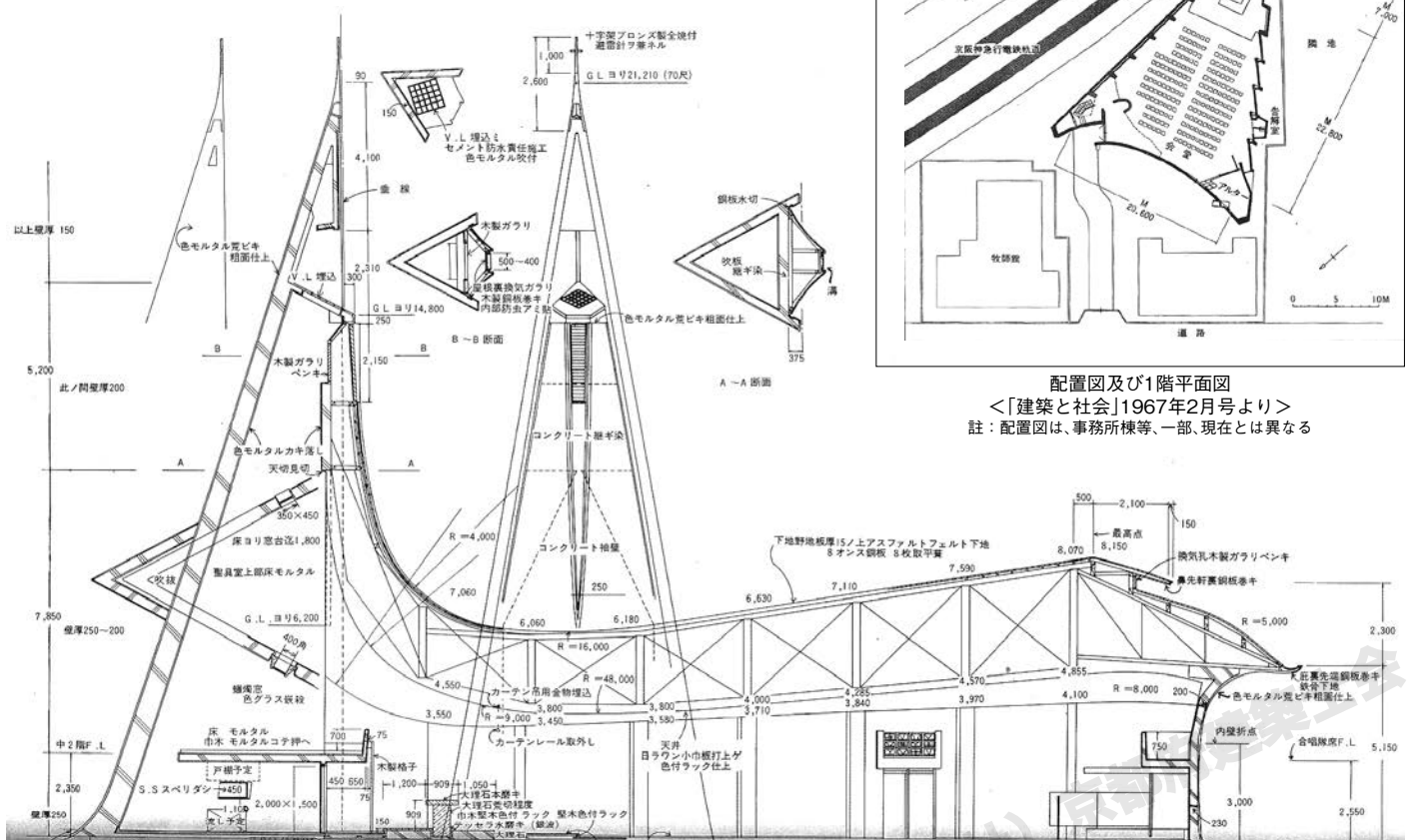
塔の高さは十字架迄、地面より約七十五尺（約22・7m）、南側で競り上がり天へと昇華している。

屋根は銅版葺きで優美なる曲線を描いている。

外壁側面は見る方向で様々に変化し、正面では大いなる壁面が、屋根の稜線と相まって包み込まれる様に人々を迎える。右手には聖母マリアの像を抱いたニッチがある。内部のキリストの御像は彫刻家、辻晋堂



配置図及び1階平面図
 <「建築と社会」1967年2月号より>
 注：配置図は、事務所棟等、一部、現在とは異なる



断面詳細図
 <「建築と社会」1967年2月号より>

(1910～1981)の作品であったが、現在(2002)は別のキリスト像が掲げられており、辻作品は事務所棟で見ることが出来る。

ステンドグラスは当初、上段に作野旦平(1931～2000)作のもの、下段に岩田藤七(1893～1980)作のものであったが、現在は上段下段共に作野の作品が取り付けられている。マテリアルと色彩は手の痕跡を残し、異次元へと観る者を誘う。作野作品は、西宮トラピスチヌ修道院、八重洲ダイビルや目黒区総合庁舎(旧千代田生命本社ビル)の建築内部でも用いられている。キリストの道ゆきの油絵は、建築家、長谷部鋭吉によって描かれていた(現在は取り換えられている)。このように村野は多くの芸術家と協働して、この建築に息吹を吹き込んでいったのである。

宗教と建築

象牙色の、しゅすのような羊皮紙の上に柱や壁を描いていくにつれ、私には難しさがわかってくる。正確な一点からインクが流れ、石の大きさを満たし、閉ざし、稜線を現わし、広間を区切り、重さを支える点を位置づけ、空気、光、修道士の通り路をつくっていく。あるときには理性が勝ち、あるときには感じや図面の正しさが勝つ。他では幾何学と象徴が拮抗し、決まる形は双方の総合ともなる。この瞬間は重大だが軽やかだ。

―「粗い石」フェルナン・ブイヨン著、
荒木亨訳―

「粗い石」は、12世紀ロマネスク建築の

代表作品、南仏にある「ル・トロネ修道院」工事監督の日記という形で書かれたものである。

僧院建設をめぐり、純粋な信仰と厳しい規律の許での現場での葛藤を描いている。

開口部の少ないロマネスク建築は13世紀、十字平面の交差点部を高みに押し上げるためのフライング・バットレス(飛び梁)やリブヴォールトの発明により、開口部の多いゴシック建築へと移行するのである。

村野作品の内、キリスト教関連の施設は、南大阪教会(1928・1981、2014・11月号参照)、世界平和記念聖堂(1954、重要文化財)、日本ルーテル神学大学礼拝堂(1969)、西宮トラピスチヌ修道院(1969)、がある。その何れにも「宗教と建築」という問題に「時間性」と「場所性」を関係づけながら、実体となる建築を構築していったのである。

△湿式▽と△乾式▽

村野作品多くの設計過程には、粘土△湿式▽模型が存在する。自らは勿論、所員もそれを制作をしていた。時には規模の大きい複雑な作品は、その都度「三浦模型」等に協力を求めていたと聴く。

村野建築の特長に△湿式▽工法が挙げられる。これはコンクリート、モルタル、漆喰等の施工に水を使用するための総称である。仕上げるために、ある一定の時間を要する。また施工する職人の技量にも出来は関係する。そこには「時間」と「人」という、積層する痕跡が残る。

現代建築では主に△乾式▽工法を求める。時間を短縮して工期のスピード化である。

り、人の痕跡を消すために工場にて品質管理を行い均質な精度を追及する。

村野がもてたものは「建築が、愛され、慈しまれ、時間の移ろいを享受することである。」と考える。

本文を記述している今日、日本列島は暑さに襲われ「皆さん、水分を取るように...」と叫ばれている。「現代建築にも、水分を...」との声がどこからか聞こえるようである。

△乾式▽の素材も、この現場において次のように職人の手が介入する。

天井は厚さ約5ミリ、巾50ミリ位の白ラワンの板を音響を考慮して曲面に張ったものである。天井の張りの仕事は良い職人によってもらったので、できもよく私は満足している。かなりむづかしい仕事なのに、職人たちは、またとこんな仕事をする機会がないといって喜んでやってもらったのは、ひじょうにありがたいことだと思う。

―「建築と社会」1967年2月号―

波打つように施された白ラワンの天井は、祭壇部で急に上昇して内部の意識を天へ誘う。半世紀経った今日、建築の足元には草花が育ち、枯れ、また育つと、命の連鎖を繰り返す。この建築を愛し建築の姿に勇気づけられ、信者や地域の人々が日常を営む。それを象徴するかのようには、村野デザインの250余席の三角蘭編み椅子は、技能を身につけた信者の手によって、七島蘭編み椅子としてその都度修復されているのである。

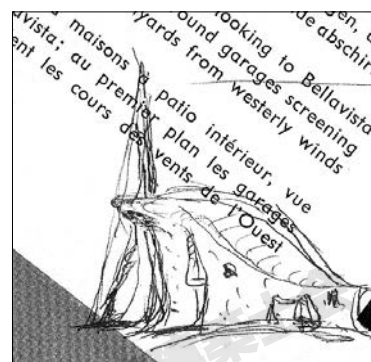


図1：外観スケッチ
＜「HIROBA」2002年3月号表紙より＞
洋雑誌に描く 一個人蔵

●参考文献

「被昇天の聖母・カトリック宝塚教会」カトリック宝塚教会リーフレット
「教会創立25年の歩み」1985年・宝塚カトリック教会
「建築と社会」1967年2月号 日本建築協会
「HIROBA」2002年3月号表紙 近畿建築士会協議会
「粗い石」フェルナン・ブイヨン著、荒木亨訳、文和書房 1973年

●写真撮影／沼田俊之

謝辞：「カトリック宝塚教会」関係者の御協力を受けました。お礼を申し上げます。



あだち・ひろし

安達英俊建築研究所主宰
一級建築士、工学修士
京都工芸繊維大学大学院修了(修士論文・近代建築の再構築に関する研究―渡邊節の建築を通して―)
元渡邊節建築事務所所員(1974～1979)
委員／京都工芸繊維大学美術工芸資料館「村野藤吾の設計研究会」委員(1998～)
建築作品／ギャラリー「アーティスロンク」(1999)
著書／「村野藤吾建築案内」(TOTO出版) 2009 (共著)

南立面の様相、広場より望む

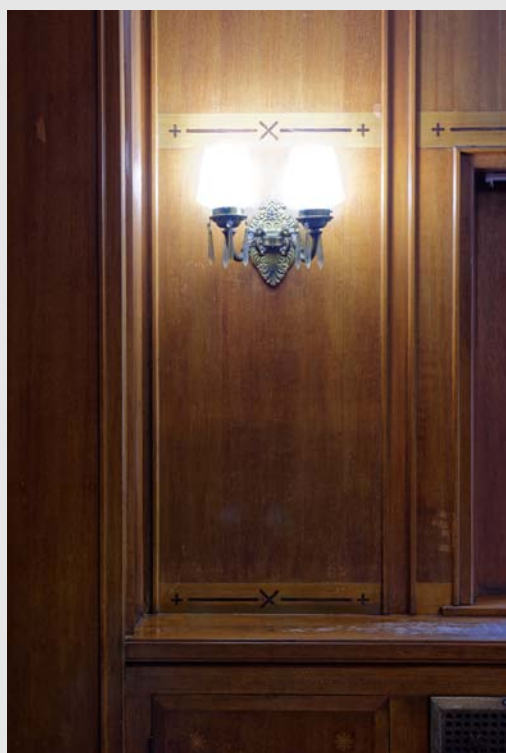


赫^{かく}奕^{やく}たる村野藤吾の建築 8

大庄村役場

1937
(現：尼崎市立大庄公民館)

安達 英俊
建築家・建築史家



2階貴賓室：壁面仕上とブラケット



波打つ手摺、左壁面も柱型部が膨らむ

村野藤吾(1891~1984)が没して、早30年が経過する。関西に多くの名作を残した、赫奕たる村野藤吾建築作品を数回に分けてその足跡を辿りたい。村野がどのように都市と時代に向き合い建築を構築したのか、検証を試みる。



塔屋の天井詳細



東側玄関を望む、中央に「オリーブを銜えた鳩」



西側立面：段上の構成に注目



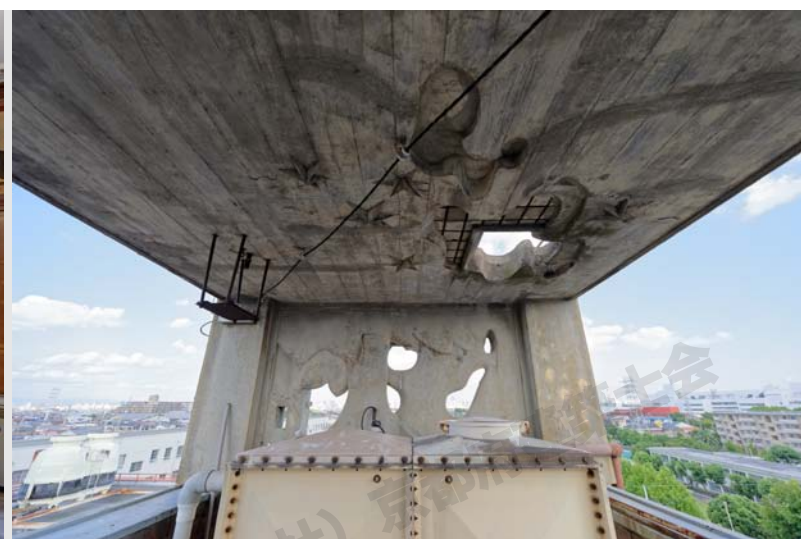
南側広場より東側廻廊アプローチを望む



東側より「レリーフ」を介して塔屋を観る



貴賓室の内観：グリルの意匠が観える



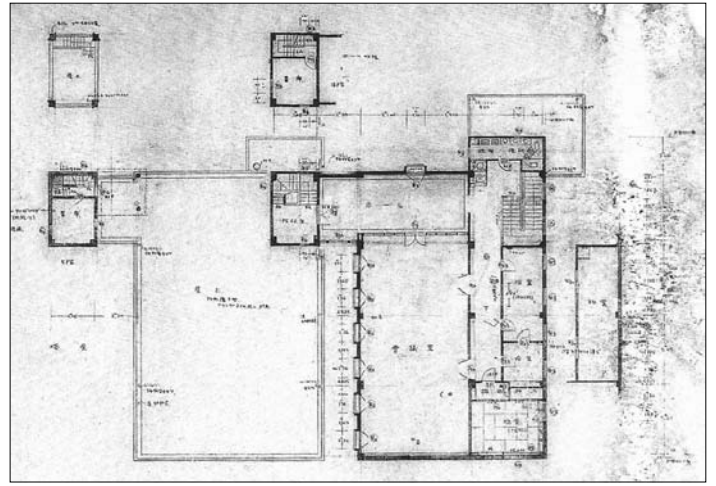
塔屋の全景

建築の諸元

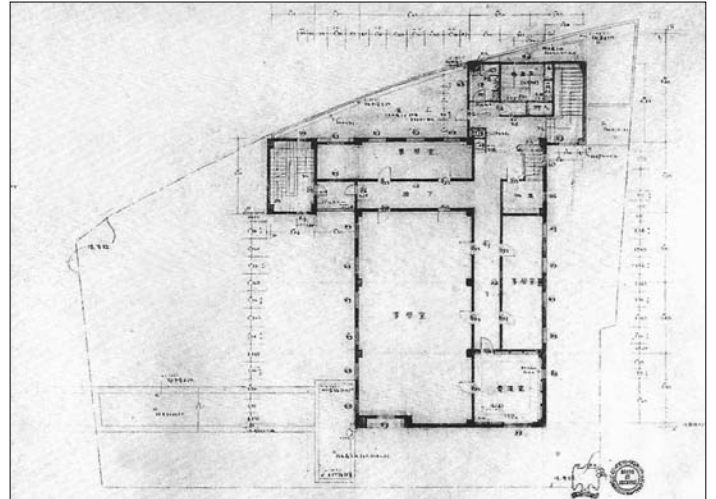
1937年（昭和12）11月、阪神工業地帯の要地、大庄村に鉄筋コンクリート造3階建の「大庄村役場」が村野藤吾の設計で竣工を迎える。

1929年（昭和4）尼崎築港株式会社による埋立て用地に大規模工場群が進出する。

手狭となった村役場は、建替えを計画していた矢先、1934年（昭和9）9月の「室戸台風」で大きく被災する。この地に工場を有した「中山製鋼所」の中山悦治（自邸、村野藤吾設計、1934年竣工）や、「そごう百貨店」（村野藤吾設計、1933年



3階平面図 (A N4942-63)



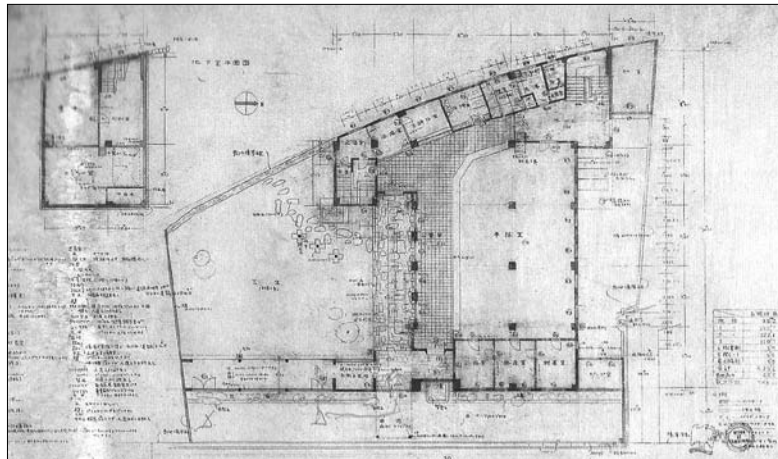
2階平面図 (A N4942-62)

＜村野藤吾建築設計図展カタログ・4 135P＞

竣工）を窺った役場幹部の推挙等もあり、村野が設計者となったと仄聞する。

帝冠様式の「名古屋市庁舎」（1933、名古屋土木部建築課）から僅か4年後の作品である。同時代には、宇部市民会館（1937、村野藤吾）、第一生命館（1938、渡辺仁・松本与作）、帝国議会議事堂（現・国會議事堂、1936、臨時建築局）、東京国立博物館（1937、渡辺仁）の作品群があり、この頃の建築の多様性は驚きに値する。

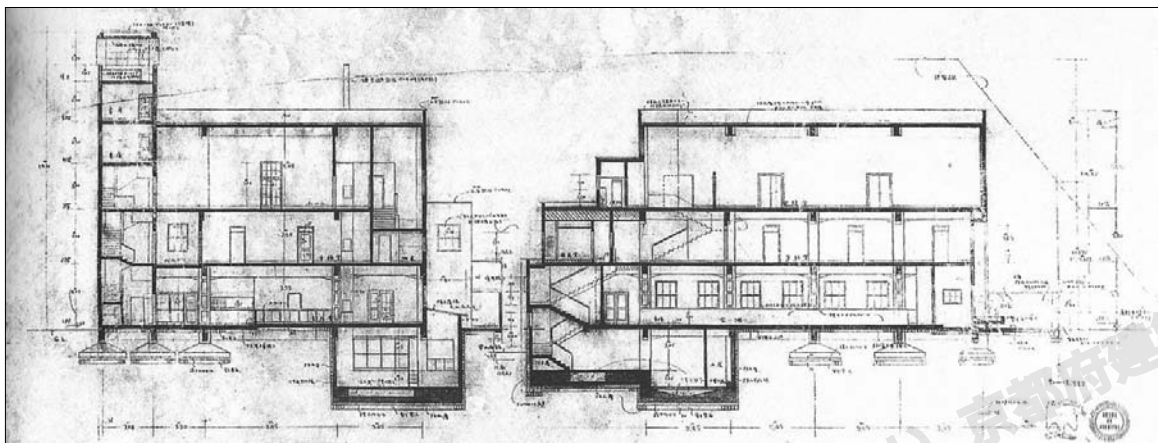
1930年独立した村野は、建築研究のため、シベリア鉄道ロシア経由でヨーロッパを、そしてアメリカを廻り建築調査を施す。



配置図及び1階平面図 (A N4942-61)

＜村野藤吾建築設計図展カタログ・4 7P＞

ロシア構成主義（タトリン他）、ドイツ表現主義（B・タウト）を咀嚼して、この建築は宇部市民会館と同じレベルに到達していた。



断面図 (A N4942-69)

＜村野藤吾建築設計図展カタログ・4 139P＞

建築のプロセス

建築へのアプローチは、東側正面を避け広場を眺めながら南北廻廊より廻り込む。

これは、桂離宮、銀閣寺や慈光院の日本建築に学ぶところであらう。

緩やかな西側湾曲は、水路（現・道路）という場所性に起因する。

村役場の平面計画は、1階、住民サービスを主におき、南側広場に開いている。驚愕するが、この時代にシチズン（市民）プラザという概念に到達している。2階に一般事務、貴賓室、3階は議場と構成は明確である。

機能を各層に分類して、それを壁と開口部に別けて立面計画に素直に表現されている。

特に、1階から2階へ、2階から3階への階段配置のズレは西側立面の段上の変化を魅せる。

仕上げ材は、森五商店東京支店（現・近三ビル、1931）や宇部市民会館（1937）に使用された塩焼きタイル。それが建築に風格をあたえる。

玄関部の外壁の1・2階の人造石小叩き開口部には「オリブをくわえた鳩」のレリーフが配されている。これは旧約聖書「ノアの箱舟」で、オリブの葉を嘴にくわえた鳩が洪水の終了をノアに知らせることに由来する。村の「室戸台風」よりの「復興の象徴」というメッセージ性がある。玄関南側「グリフィン」のレリーフはギリシャ神話にある、頭と翼は鷲、胴体はライオンという守護神であり、それがこの建築を護る。

2階東奥には「貴賓室」がある。床は、

寄木細工、壁面はオーク練付け板、幅木、建具額縁に詳細なるディテールをみせる。空調グリルに施された、オリブ文様のアイアンワークが美しい。

西側、階段室をもつ塔屋には、天井、星や雲を模した装飾や、配筋を彷彿させる格子模様、そして雲状の開口部、壁面には「オリブ」の透かし彫りをして建築に物語性を与えている。

当時の公共建築は新古典様式より抜けたし「帝冠様式」・「表現主義」の様を呈しているが、この建築は一部に装飾を拝したモダニズム建築に近づきつつある。

「ヒト」・「コト」・「モノ」

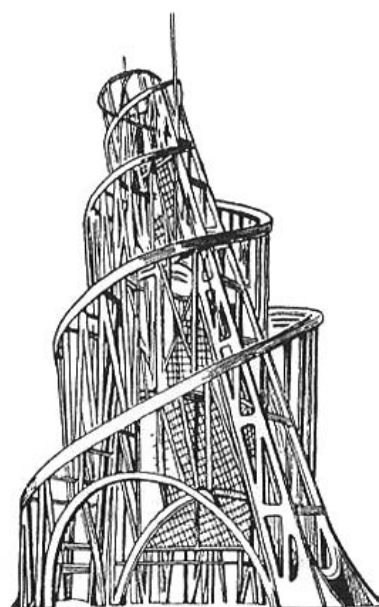
ヨーロッパ、アメリカの外遊は村野建築に大きく影響する。

渡邊節のもとでの「様式建築」より距離を置き、自らの建築を模索する。

アプローチの広場や塔はストックホルム市庁舎に、ファサードはロシア構成主義、仕上げ、装飾等はドイツ表現主義を咀嚼していると考えられる。

建築を現地にて体感し時代性を学ぶという「デキゴト」は、当時の日本建築の閉塞感とは乖離する。戦後の公共建築を彷彿させる「タテモノ」がここにある。

階段手摺の意匠は、渡邊建築事務所時代より学んだ現場での三次元曲線を創出する手法である。これは図面やスケッチで検証したデザインを、現場にて水平を測るホースと水を使用して、水を張ったホースでその曲線を是正するのである。筆者は、渡邊事務所の現場主任よりその手法を幾度となく学んだ。各重要ポイントを計測して、平



「第三インターナショナル記念塔」案（ウラジミール・タトリン）1922
＜「近代建築史」蔵田周忠著より＞

面、断面、展開図にプロットすることで、制作図が実物へと転用される。

1986年（昭和61）改修工事が行われている。改修設計は「村野建築事務所」ではなく、「都市設計」であった。外壁タイルの類似タイルによる修復、アプローチの円柱「紫雲石」の再生という「村野意匠の継続」への努力があった。

現在、SNSの急激な変化は「モノ」が「ヒト」や「コト」を飛び越えて、全体へと表出されている。「コト」は「ヒト」を介して「物語」を紡ぐのである。断片たる建築言語は、文脈とはなりえない。

建築は未来への投げられた「モノ」である。未来の「コト」を予測するのは「ヒト」である。「モノ」は結果となり、社会の財産として現存する。

1930年、建築行脚で「タトリン」と出会い、彼より「記念塔」のスケッチを手して、その後、生涯を通じて所長室に飾られていた。

「建築」は、常に未来に投げられた社会の「宝モノ」であることを、この「ケンチク」は教えてくれる。

●参考文献

「大庄公民館春の見学会解説」2015年 桃谷和則
「村野藤吾 1928—1963」1983年 新建築社
「村野藤吾建築設計図展カタログ・4」2002年 京都工芸繊維大学美術工芸資料館・村野藤吾の設計研究会
「村野藤吾建築設計図展カタログ・8」2006年 京都工芸繊維大学美術工芸資料館・村野藤吾の設計研究会
「近代建築史」1965年、蔵田周忠著 相模書房

●写真撮影／沼田俊之

●謝辞：「尼崎市立大庄公民館」関係者のご協力を受けました。お礼を申し上げます。



あだち・ひでとし

安達英俊建築研究所主宰
一級建築士、工学修士
京都工芸繊維大学大学院修了（修士論文・近代建築の再構築に関する研究—渡邊節の建築を通して—）
元渡邊節建築事務所所員（1974～1979）
委員／京都工芸繊維大学美術工芸資料館「村野藤吾の設計研究会」委員（1998～）
建築作品／ギャラリー「アーティスロンク」（1999）
著書／「村野藤吾建築案内」（TOTO出版）2009（共著）

茶室・八畳半台目の南面
紅葉、ドウダンツツジ、堀越に松林その先に大淵池を望む



赫^{かく}奕^{やく}たる村野藤吾の建築 9

佐伯邸

1965
(現・松伯美術館)

安達 英俊
建築家・建築史家



茶室・八畳半台目の南庭より
応接間テラス、居間バルコニー、食堂と雁行型建築が連続する様相

村野藤吾(1891~1984)が没して、早30年が経過する。関西に多くの名作を残した、赫奕たる村野藤吾建築作品を数回に分けてその足跡を辿りたい。村野がどのように都市と時代に向き合い建築を構築したのか、検証を試みる。



八畳半台目中板付の広間席の床の間
床柱、紋丸太、床框、杉面皮角の呂色漆塗仕上



食堂より居間を眺める
スリットの欄間、二重に施され建具の詳細に感銘する



茶室・四畳半
にじり口をみる 突上窓には照明が仕込まれている



前庭より透廊と表玄関棟を眺める



四畳半の茶室棟：軒下と独立柱の繊細さに注目する



表門より透廊を介して前庭、表玄関へのアプローチを眺める
左手に茶室の萱葺屋根を望む

1965年の「桂離宮」

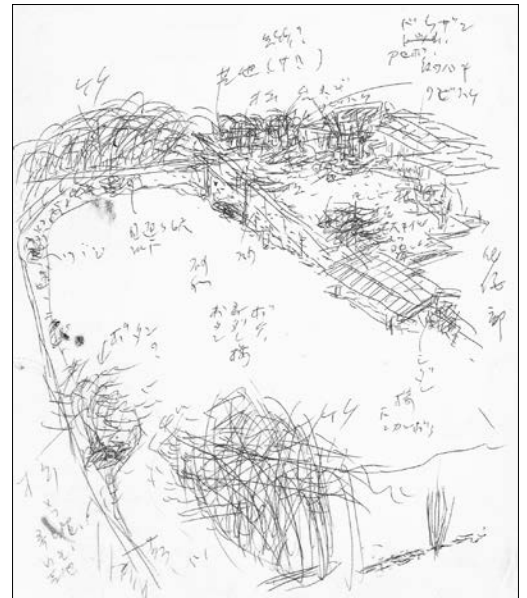
住宅主、佐伯勇（1903～1989）は1951年、7代目・近畿日本鉄道（以下近鉄）社長につく。1950年代後半より奈良市学園前登美ヶ丘の開発に着手し、最も奥地、ため池（大湖池）の北側敷地約10,000㎡に自邸設計を村野藤吾に委ねる。

前身の「大阪電気軌道株式会社」と村野の関係は、遡ること「あやめ池温泉」（1929年竣工）から始まる。その後、戦前戦後を通じ「近鉄」による阿倍野、上本町の村野建築群は街並を形成することとなる。

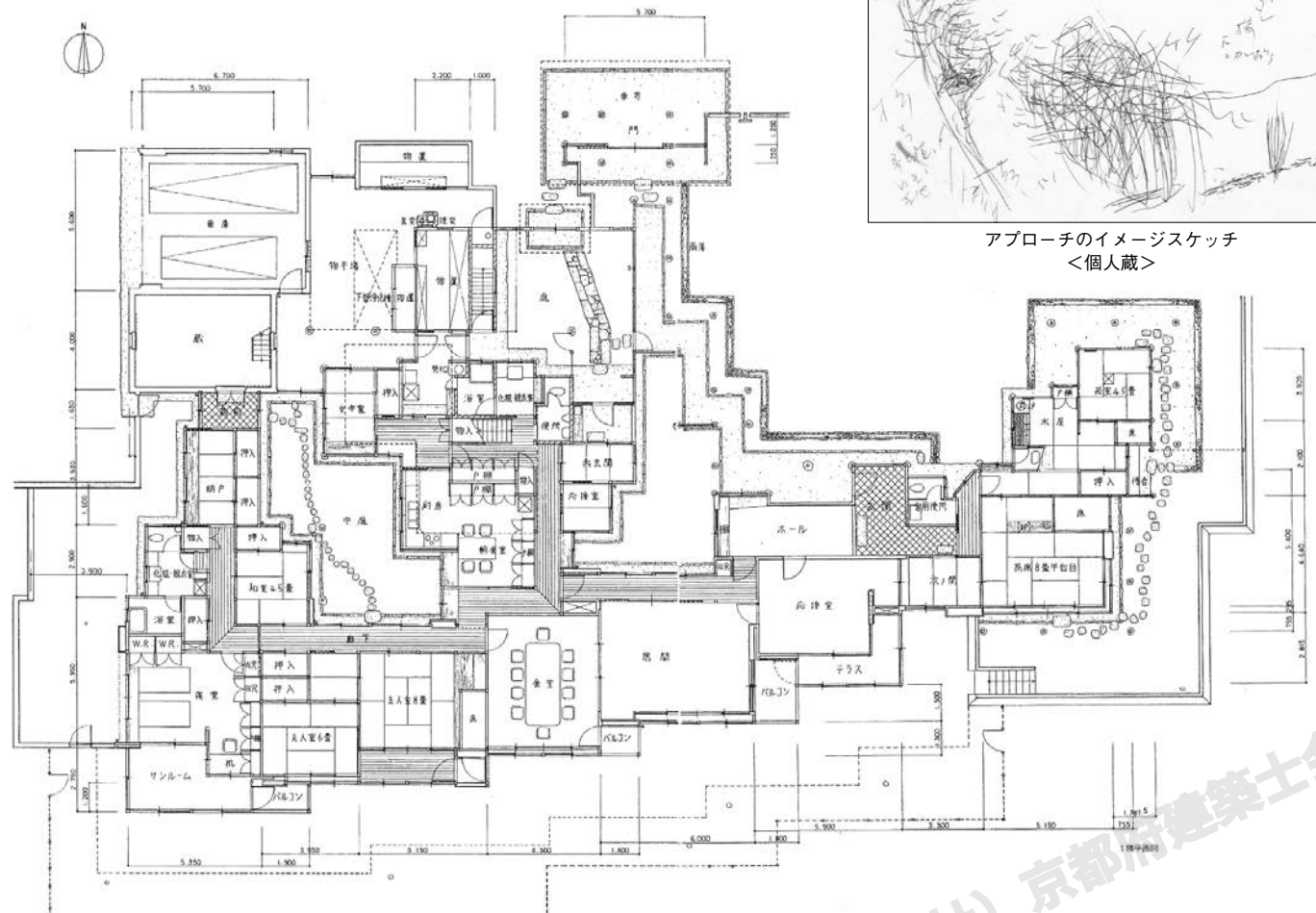
ここに一葉のスケッチがある。佐伯邸の正門より玄関に到る前庭のアプローチを俯瞰



桂離宮配置図
＜「桂離宮」堀口捨己著・1952・毎日新聞社より＞



アプローチのイメージスケッチ
＜個人蔵＞



佐伯邸 配置図及び1階平面図
＜「和風建築秀粹」・1994・京都書院より＞

建築のプロセス

雁行型平面計画は「桂離宮」はじめ、書院建築、数寄屋建築の多くにみられる。

玄関部を介して左(東)側に和式、右(西)側に洋式が配されている。その奥に家族の諸室が並ぶ。応接室、居間、食堂は中央部に位置し、和風を意識した洋室である。月見台、広縁にあたる部分が付加され、仕切りにはガラス建具と雨戸が仕込まれ二重構成となっている。

和式部の構成は、茶室「伯泉亭」と名付けられた八畳半台目の広間席と四畳半を中心として、南側の建具と東側に建具には高さの違いをつけ、風景の変化に呼応する。表千家残月亭の研究や、自邸での「残月の床」の検証が結実する。堀口捨己「八勝館・御幸の間」(1950)の月見台、広縁に通じ、南東に広がる大池との関係は刻々と変化する時間を愛でることができるのである。

14年後の「松寿荘」(1979)では更なる変化をみせるが、その系譜に見合う完成度だと感じられる。

立面において「雁行型平面」は、寄棟瓦屋根、銅版葺き庇屋根が軽妙なる変化をみせ優美である。南側は土地の高低に合わせ高床となる。また軒を支える独立柱も、内部より可視のものは丸柱、不可視は角柱という変化が診える。背割れは外側に配置、埋木が施されている。

厨房は当時としての最新設備のシステムキッチンであり、ラワン合板の造作家具、金物、納まりに感銘する。

室内の素材は居間の壁面、布クロスをは

じめ吟味が重ねられ、各処村野ディテールがみられる。

庭は「植為」五代目・小島佐一の作であり行き届いた手入れが為されている。

北側の四畳半の茶室の外観は独立した建築のように見え、茅葺屋根の美しさが際立つ。にじり口の沓脱石・鞍馬石が、優雅に軒下を引き締めている。

「切断」と「接続」

その時代の環境、その条件に合わせて、建物をこなして行くから、それで、いくらか見れるように出来るんじゃないかと、こう思います。

—村野藤吾の最後となる

インタビュアーの言葉である。

(HIROBA

1985年1月号より) —

「現在」という視点で持てる能力を駆使して設計する。それは現出した建築を、施主、社会、そして未来に送り出すからである。本建築は佐伯氏亡き後、近鉄が出資した美術財団が受け継ぎ松伯美術館の附属施設となり、ほぼ原型のまま現在に至る。美術館、近鉄関係者によって維持管理されている。その努力には感銘をうける。

半世紀に及ぶ建築と庭の保存「使用しながら、守り続ける。」と当美術学芸員は語る。パウ・クレール晩年作品に「グラス・ファサード」(1940)という名作がある。半世紀後に、裏面に少女(マノン・グロピウス)と天使の絵画が発見された。表面はパウ・ハウスのカーテン・ウォールがモチ

ーフである。「美術」と「建築」は深く関係付き、ともに鑑賞者の精神に根づく。時間を経て。

情報が過多となり、スピードを要求する傾向が社会にはある。

情報を一度切断して、持てる能力で思考して一葉のスケッチを描いて定着する。千葉雅也著・「動きすぎたはいけない」(2013)というテキストが手元にある。現在の状況、情報化社会における、歴史の扱い、社会との関係、場所性、時間性、身体性を考察して、ジル・ドゥルーズ(1925~1995)の哲学を解明する。

事物、私たちの心、脳、身体が、別の構造に「生成変化」してやまないことを、存在論のレベルで「肯定」していくのだった。

—「動きすぎたはいけない」

(2013) 14Pより —

この建築から南側にパノラマ状に「接続」する風景が、北側に窓枠に「切断」された風景が、時を経て観える。

「内」と「外」という建築の概念は「セツダン」と「セツゾク」へと昇華され、村野の「精神性」は、いまも「序の舞」(上村松園・画)のように凜としてこの地にあり。

●参考文献

「村野藤吾和風建築集」村野藤吾著 新建築社
「和風建築秀作」京都書院
「運をつかむ」佐伯勇著 実業之日本者 1980年
「動きすぎたはいけない」千葉雅也著 河出書房新社 2013年
「村野藤吾のデザイン・エッセンス6」
「HIROBA」1985年1月号 「HIROBA」2002年4月号 表紙・解説文 安達英俊

●写真撮影/沼田俊之

謝辞:「近鉄グループホールディングス株式会社」「松伯美術館」関係者のご協力を受けました。お礼を申し上げます。



あだち・ひとし

安達英俊建築研究所主宰
一級建築士、工学修士
京都工芸繊維大学大学院修了(修士論文・近代建築の再構築に関する研究—渡邊節の建築を通して—)
元渡邊節建築事務所所員(1974~1979)
委員/京都工芸繊維大学美術工芸資料館「村野藤吾の設計研究会」委員(1998~)
建築作品/ギャラリー「アーティスロンク」(1999)
著書/「村野藤吾建築案内」(TOTO出版) 2009 (共著)

●告知

「松伯美術館」1月、2月の展覧会情報

上村松園・松篁・淳之「温故知新」展
~古典は宝の山!~

1月31日(日)まで
(年始1月1日~4日・月曜休館 但し1月11日は開館し、翌12日が閉館)

公募展「第1回松伯日本画展」

2月9日(火)~3月6日(日)
(月曜休館)

近映レジャービルアポロビルの夜景見上げ —都市の混沌(カオス)をみせる—
中央にアポロビル、右側にルシアスビル、左側に阿倍野センタービル(村野設計・1970)、その左側あべのハルカス近鉄本店タワー館

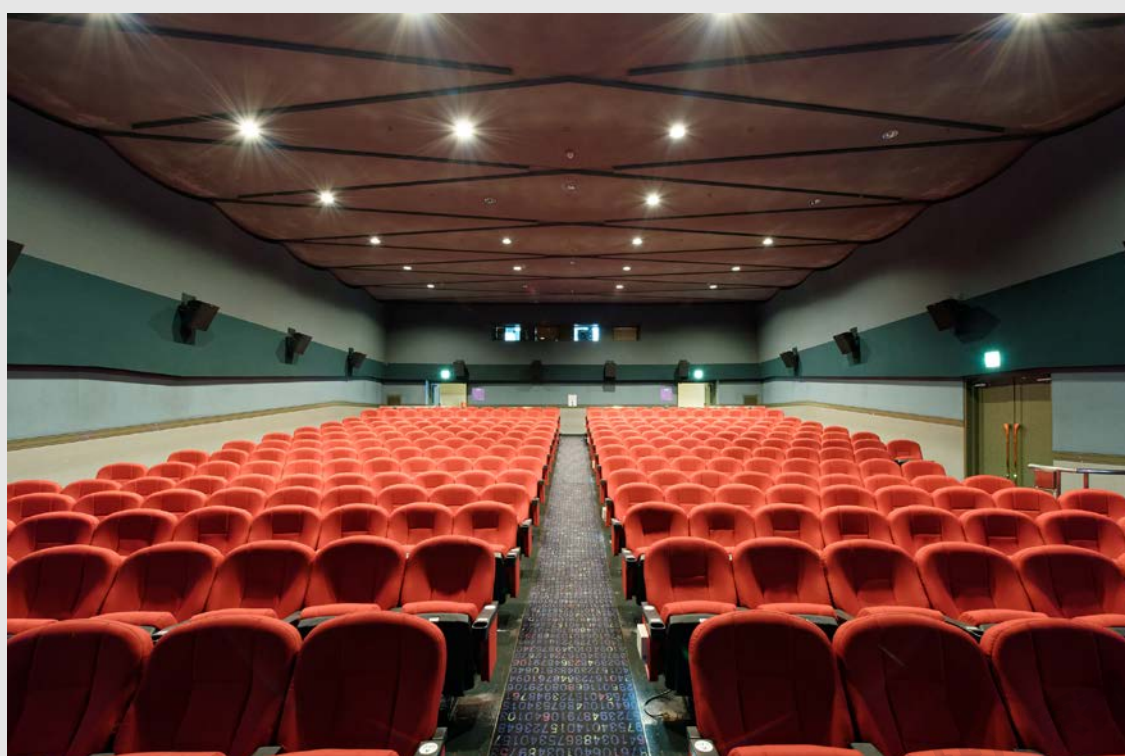


赫^{かく}
奕^{やく}
たる
村野藤吾の建築
10

近映レジャービルアポロ

1972
(現・きんえいアポロビル)

安達 英俊
建築家・建築史家



劇場No.1スクリーンサイドより、映写室側を望む
天井の二等辺三角形の意匠は竣工時のもの

村野藤吾(1891~1984)が没して、早30年が経過する。
関西に多くの名作を残した、赫奕たる村野藤吾建築作品を数回
に分けてその足跡を辿りたい。村野がどのように都市と時代に
向き合い建築を構築したのか、検証を試みる。



近映レジャービルアポロビルの正面(昼景)



劇場ロビーにあるギリシャ様式の
イオニア式オーダーのレプリカ



東側よりの外観
L型の袖壁の意匠とカーテンウォールに注目



劇場No.2の入口よりスクリーン正面を望む



地下2階、地下1階、1階と
垂直に連続するエスカレーター



劇場ロビーのインテリア：竣工時より変更されている



地下2階より吹抜けを見上げる

建築の諸元

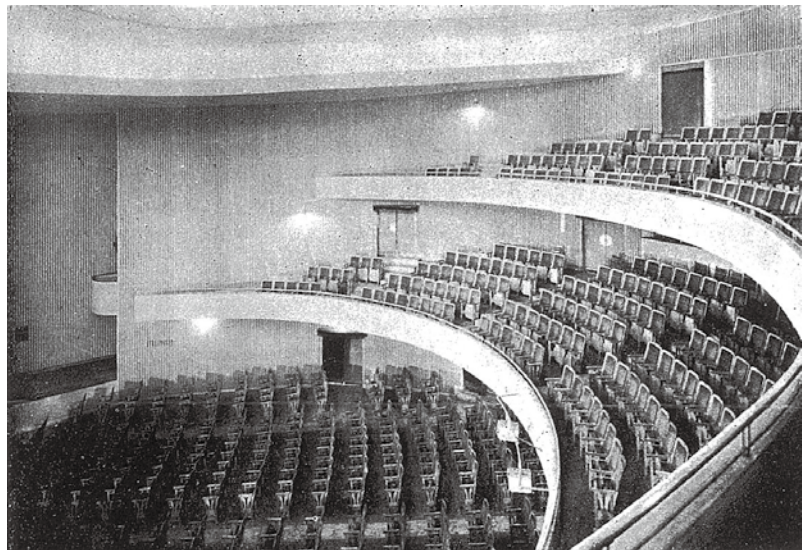
1950年公開の黒澤明（1910～1998）監督「羅生門」は、ヴェネツィア国際映画祭金獅子賞を獲得し、米軍占領下で国際的な自信を喪失していた日本人に希望を与え、日本映画の黄金期を迎える。

同年1950年「アポロ座」（建築と社会 1951・11）は、村野藤吾の設計で竣工する。

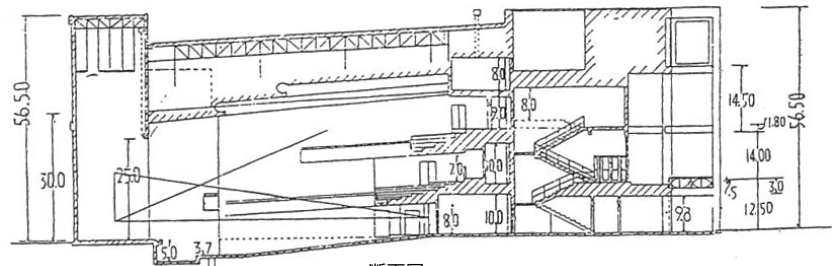
ギリシャ神話、ゼウスの子、芸術の神アポロンに由来した劇場「アポロ座」は、洋画ロードショー劇場としてオープンして



アポロ座 外観

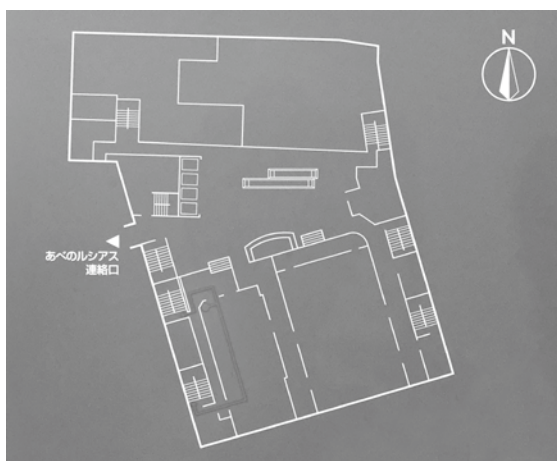


劇場 内観



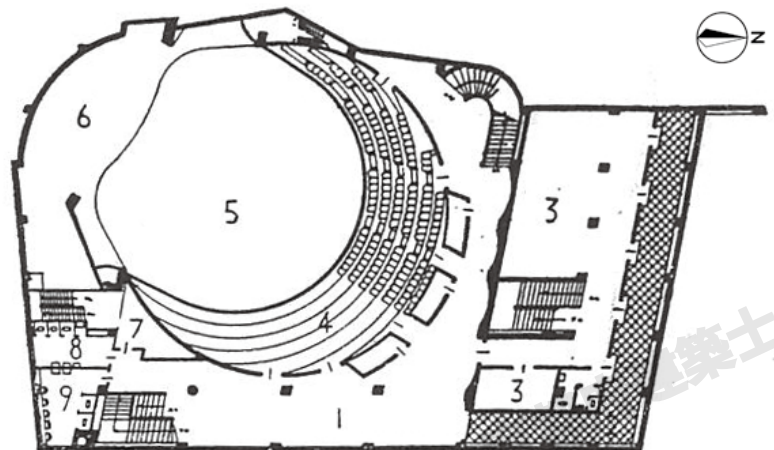
断面図

レジャービルとして「近映レジャービルアポロ」は、1972年7月に竣工する。時代を反映して多様な文化、レジャー複合施設が誕生する。構成をみると、2・3階にライブハウス「アンデュー」、3階にアポロ・サテライト・スタジオ、4・5階に映画劇場、6階ビリヤード、7・8階にボーリング場とある。



劇場平面図

南東側が劇場No.1、南西側が劇場No.2である



2階平面図

<「建築と社会」1951年11月号より>

の名も残る。

その後、隣接する「ルシアスビル」と連絡橋により、NO1・NO8の上映館（シネマコンプレックス）となり今日に至る。

この4階の劇場シネマNO1は約300人収容となり、天井のみ村野意匠が残り、シネマNO2は約200人収容でリニューアルされている。

東側の近鉄百貨店のとなり（現・あべのハルカス近鉄本店・ウイング館）には、1954年竣工の村野藤吾作品、近映会館（近畿映画劇場）が嘗てあった。白い平面に横長のストライプ状の開口部をもち、天井の巨大な対の二等辺三角形が印象的であったと仄聞する。

建築のプログラム

計画の変遷を診てみよう。

「アポロ座」は、ロシア構成主義、例をあげればコンスタンチン・メーリニコフ等を参照されていると考えられる。円形の平面計画、上階の手摺をセットバックし視界を上げた3層の馬蹄形客席、1200人収容の大劇場。これに附属したL型のロビー、バルコニー、事務室、貸室等のブロックがある。SRC造、3階建（一部4階）、地下1階、屋根はS造である。

「近映レジャービルアポロ」は、劇場のある長方形のブロックとひとまわり小さいブロックが鋭角で、エスカレーターの軸線ズレを生みだす。SRC造、12階、地下5階となっている。

立面は、「アポロ座」では、前面は都市

計画路線にかかるため仮設として縦6マス、横4マスに区切られた格子（鉄骨造）、北・東側にセミパブリックの通路、格子は映画看板の設置を意図している。仕上材は人造石ブロック及び人造石塗現場たたき仕上。

「近映レジャービルアポロ」は、北側ファサードの大部分はカーテンウォールで構成され、「ドウトン」に類する。両サイドにはL型の裾広がりの大小4つの松文様の開口部をもつ壁面がある。スリット状のヴェランダにはU字型のアルキャスト手摺があり、東・西面も、北面に類する。

都市風景を映し出すスクリーン（銀幕）

建築のイメージは「ヨットをイメージしたものであり、ビルの左右は巨大な帆の形を表しています。」（アポロ30年のあゆみ・39P）の記述がある。

美術家・写真家、杉本博司（1948）の写真集「劇場」に、白く光る幕（スクリーン）を1920年代のアメリカの劇場内で撮影した作品がある。

観客の「不在」は時間を凝縮し、発光体と化した「銀幕」はオールデコ様式の劇場内部を投射する。この写真作品を視た時、この建築のファサードを連想した。

北側の天王寺公園、JR西日本天王寺駅に乗り入れる電車、東西に車道を行き来する自動車、歩道の人々、この風景の中にとつと私には、都市生活を映し出す「スクリーン」、両サイドに松文様のある「引幕」のように観えてくる。

商業建築というのは、短期間の十年とか十四、五年で資本をもとへ返します。長い間かかって資本を返せばいいものは、お金をはたして、私は、記念性に富む材料をよく使っています。（中略）ストラクチャル・ライフ（構造的な生命）が永久であっても、コモーション・ライフ（商業的な生命）というのがありますね。それによって、規制されます。だから、コモーション・ライフとストラクチャル・ライフとの組み合わせをどうするかということが、設計のポイントですね。それに対して、材料工法をよく考えて決めます。

「建築をつくる者の心」村野藤吾著

1981・188P

阿倍野の映画劇場施設は、あやめ池温泉余興場計画（1932）、京都公衆会館（1949）、新歌舞伎座（1958）、の系譜にあり、日本生命日比谷ビル・日生劇場（1963）へと集大成される。

表徴として、内部の変遷の対応できるように、場所性と時間性を考慮して、村野は次の経済界の名言を肯定的に理解する。

「建築は、たんに

地用の保証にすぎない。」

（R. P. ボルトン）

皆さん。Mobile・Personal・Computerをshutdown（切断）して、65年の時を刻んでいまも生きるシネマ（劇場）に出かけて身をおいてみては如何でしょう。

●参考文献

「アポロ30年のあゆみ」（アポロ会・榎きんえい・2002）
「建築と社会」1951年11月号（日本建築協会）
「建築と社会」1985年11月号（日本建築協会）
「村野藤吾建築案内」（TOTO出版・2009）
「建築をつくる者の心」村野藤吾著（共同プレーンセンター・1981）

●写真撮影／沼田俊之

「近鉄ホールディングス株式会社」「株式会社きんえい」関係者のご協力を受けました。お礼を申し上げます。



あだち・ひろし

安達英俊建築研究所主宰

一級建築士、工学修士

京都工芸繊維大学大学院修了（修士論文・近代建築の再構築に関する研究—渡邊節の建築を通して—）

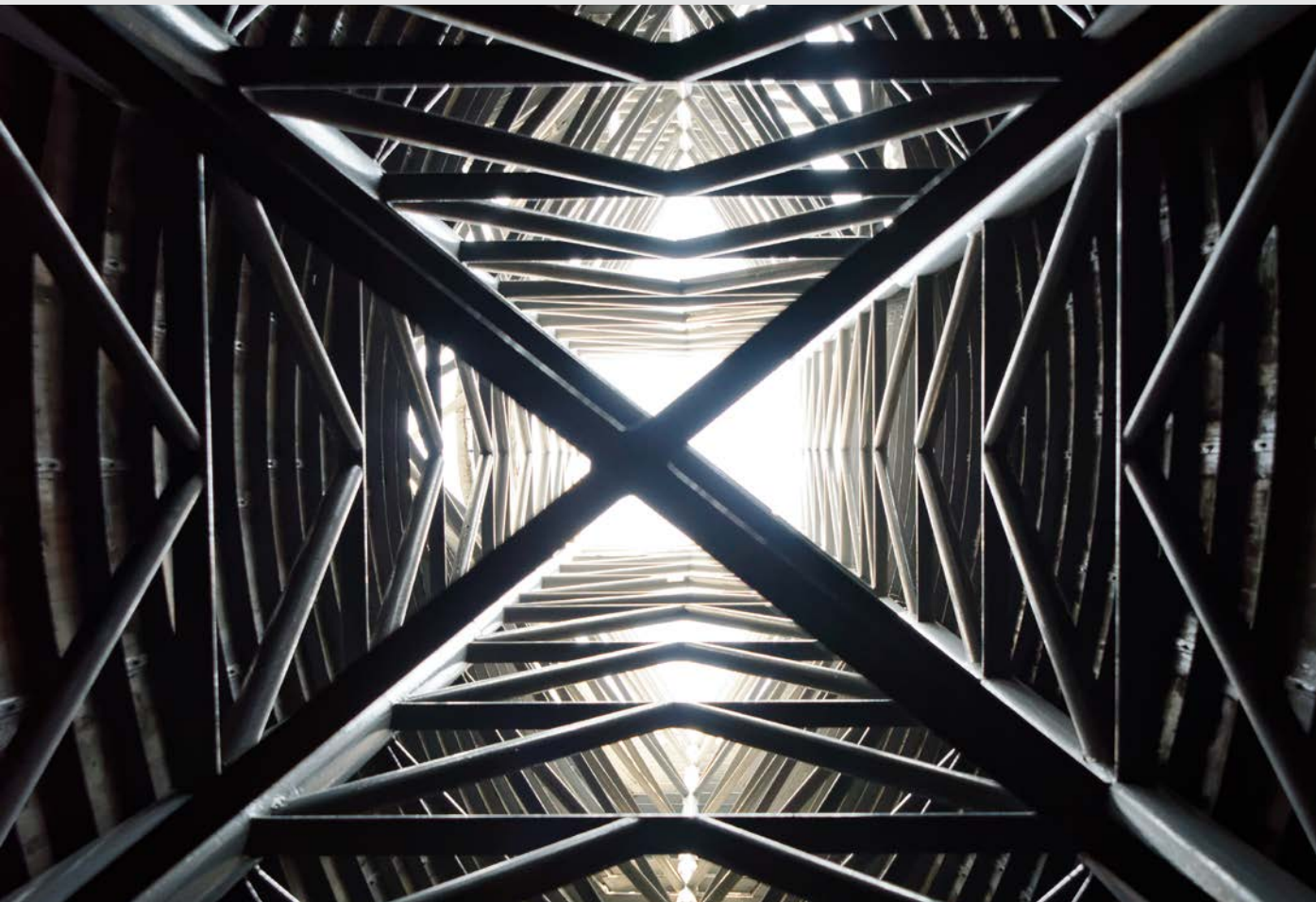
元渡邊節建築事務所所員（1974～1979）

委員／京都工芸繊維大学美術工芸資料館「村野藤吾の設計研究会」委員（1998～）

建築作品／ギャラリー「アーティスロンク」（1999）

著書／「村野藤吾建築案内」（TOTO出版）2009（共著）

B基
六角形の内部を介して空を仰ぐ



赫^{かく}奕^{やく}たる村野藤吾の建築 11

梅田吸気塔

1963年

安達 英俊
建築家・建築史家



北東からの俯瞰
奥は、阪神百貨店の工事現場

村野藤吾（1891～1984）が没して、早30年が経過する。関西に多くの名作を残した、赫奕たる村野藤吾建築作品を数回に分けてその足跡を辿りたい。村野がどのように都市と時代に向き合い建築を構築したのか、検証を試みる。



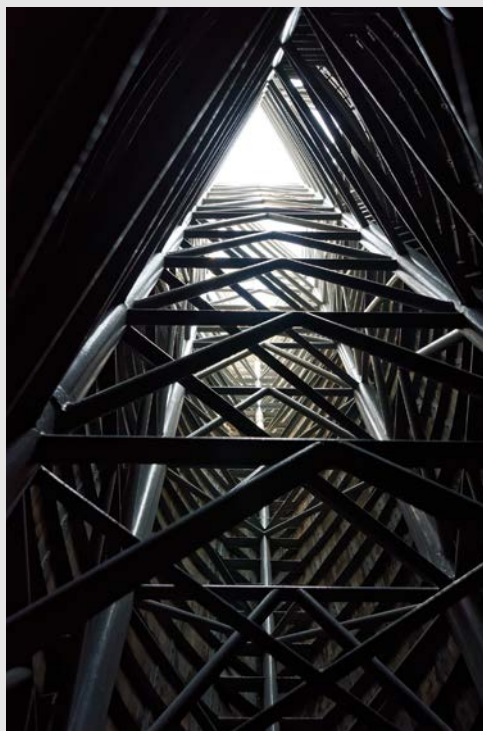
北東からの立面
樹木は育ち吸気塔に並ぶ



南西からの立面



5基の中央部から空を仰ぐ



C基
五角形の構造体と開口部



D基のコーナーエッジと
ステンレス板の詳細



吸気塔の構造体と詳細



三次元曲線に加工された足元
地面のタイルと連続する

建築の諸元

梅田吸気塔の内部写真と俯瞰の写真を見
てみよう。

モグラの眼と鳥の眼で、大阪の中心地梅
田の「空」を堪能しよう。

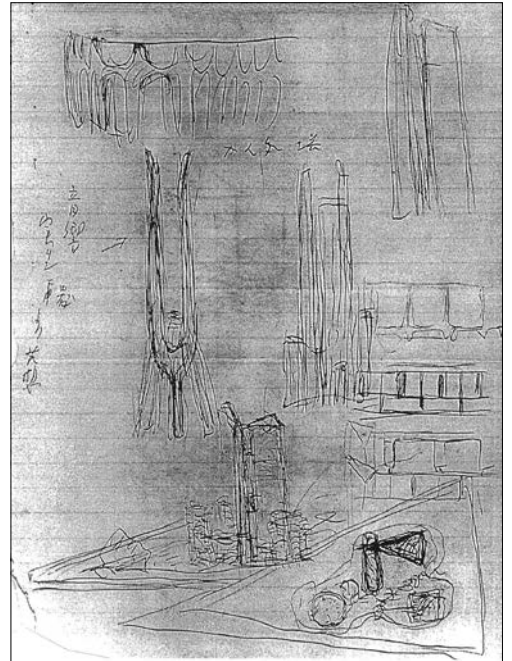
その装置が、1963年に村野の手によ
って出現した吸気塔である。

梅田地下街はこの年、放射線状に延びる
街区を統一して、吸排気塔の設計を村野藤
吾に依頼している。確認通知書（工作物）
によると、1963年11月着工、同年12月
完了予定とあり「装飾塔5基（A、B、C、
D、E）」との記述がある。

村野は建築屋上の意匠について「鳥が見
ているからしっかりデザインしなさい。」
と、常に所員に語っていたと聞く。

建築には「用、強、美」の要素が必要と
いわれている。その意味では、正しく「建
築である。」

吸気という機能（用）をもち、5本の柱



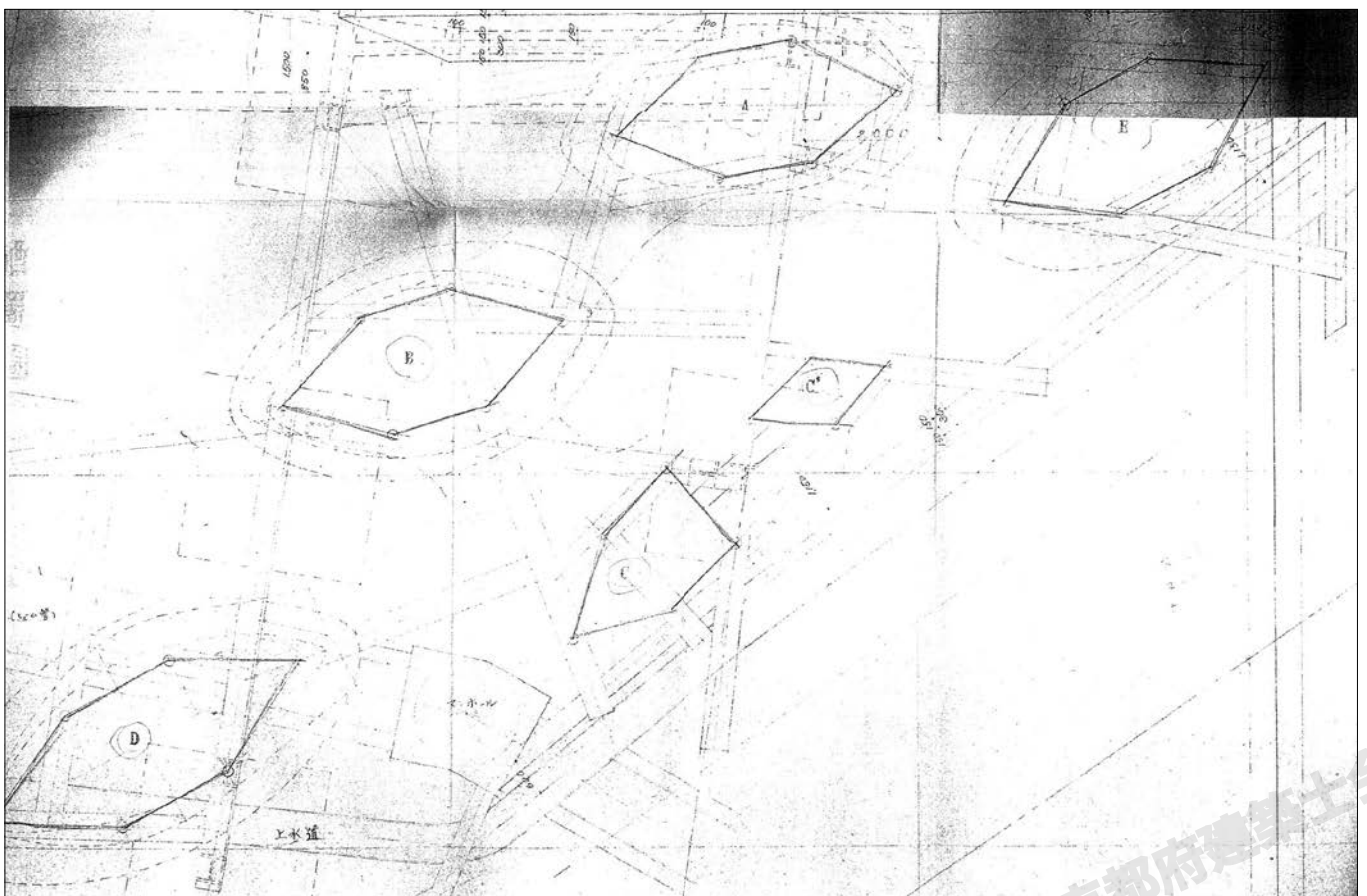
イメージスケッチ
〈個人蔵〉

が連結して強度（強）をもち、なによりも
美しい。勿論、排気設備もその足元にある。
大阪地下街―迷路のような地下街―は、
いつ発生したのであろう。

1933年、大阪高速鉄道は心斎橋―梅
田間を開業させているが、土佐堀川での水
害等で遅れ、仮梅田駅での開業である。記
録によると、この吸気塔のある現・東梅田
駅周辺に位置する。1935年、仮梅田駅
から梅田駅に延伸されている。仮梅田駅は
ウィーン分離派の意匠であり、リベッポ
ルトの鉄骨が連続して美しい。心斎橋では、
そごう百貨店の地下店舗と駅は繋がってい
た。

塔の足元を見てみよう。吸気塔は緩やか
にピンコロ石（竣工時、現タイル張り）の
地面に連続する。

Eero・Saarinen（1910～196
1）の大地と建築の接点を彷彿させる美し
いものである。村野は彼の建築から多くの
ことを学んでいる。



平面図（確認通知書（工作物））
〈大阪地下街株所有〉

建築のプログラム

この塔のイメージは、どこから来ているのだろう。

村野のスケッチ資料より、音叉（音響実験器）より発想した記録がある。

同時期に設計していた千代田生命本社ビル（現・目黒区総合庁舎・1966）のフアサードスケッチも併記されている。

5基（足元では6基）の塔は鉄骨で、六角形、五角形、四角形で構造物をつくり、50mmのフラッシュパネルの表面に1.5mmのステンレス板をパッチワークのように張り付けている。

竣工当時は噴水がその足元にあったが、現在は除去されライトアップの設備がある。

5基の高さは、A・13.5m／B・15.0m／C・14.4m／D・18.0m／E・15.4mと記されている。微妙なバランスと自由なる形態は、マイヨールやジャコメティを彷彿させる。

都市・大阪「空」への渴望

周辺に植えられた樹木は半世紀の時を経て同程度まで育ち、ステンレス吸気塔は見え隠れする。しかし、ひとたび太陽の光を浴びれば、キラキラと輝く。

地下街は人工照明であり、自然光は及ばない。勿論、都市空間でありながら住民は一人も存在しない。村野は、空への「渴望」をしていたのではなからうか。

前記したように、音叉（音響実験器）よ

り発想した記録がある。

しかし、村野は多くのイメージを重ねしている。それは次の言葉でわかる。

準備期間ということは、見ているということは、我々が直感して一々解いていくのと同じことです。私も外国の雑誌を見ている時、私は自分でこれはいいなと思ったものを全部切り取ってたくさんたまっていく。それが準備みたいなんですね。準備の一つでね。それが何かの時に出て来る。その時必要でなくても、平常からそういうものを、自分で感じたものは、専門誌はもちろんです。流行雑誌でも、服飾の雑誌だとかね。それに類するようなものを切り取っている。

（建築をつくる者の心

村野藤吾著・115、116P）

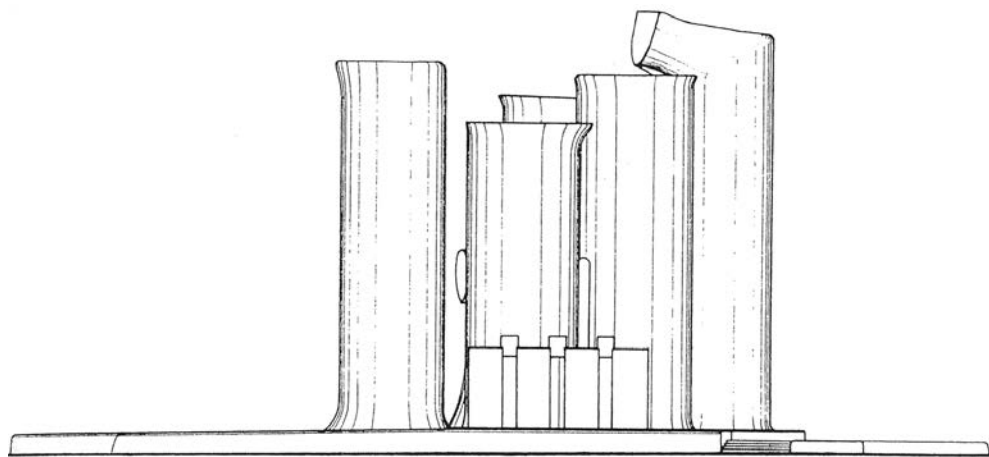
このイメージを分析すると、

思い浮かぶのはウラジミル・タトリン（1885～1953）「第三インターナショナル記念塔」（1919）とフレデリック・キースラー（1890～1965）「エンドレスハウス」（1959）である。ともに、計画案のみである。

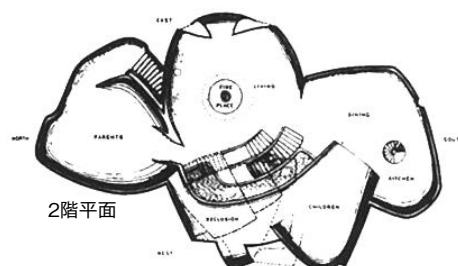
そのイメージが、彼のスクラップにあればよいと考えている。

時間の集積は建築家の「眼」を育て、それが連鎖して、新しい造形が生まれる。

村野作品は今も、観て、使用する人々の創造を掻き立てるものがある。

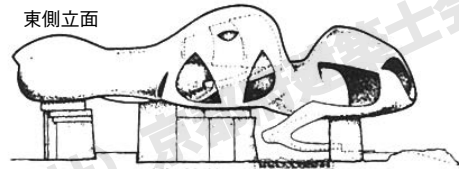


立面図（個人蔵）



2階平面

東側立面



エンドレスハウス
（「都市住宅」1969.01号表紙より）

●参考文献

大阪地下街（株）パンフレット
村野藤吾デザインエッセンス・3—外の装い
「建築をつくる者の心」大阪府発行 1981年
「都市住宅」1969年01月号 鹿島出版会
「地下鉄「駅」モダニズム」安達英俊（「大阪人」2003年06月号）

●写真撮影／沼田俊之

「大阪地下街株式会社」関係者のご協力を得ました。お礼を申し上げます。

あだち・ひでとし

安達英俊建築研究所主宰
一級建築士、工学修士
京都工芸繊維大学大学院修了
（修士論文・近代建築の再構築に関する研究—渡邊節の建築を通して—）
元渡邊節建築事務所所員（1974～1979）
委員／京都工芸繊維大学美術工芸資料館「村野藤吾の設計研究会」委員（1998～）
建築作品／ギャラリー「アーティスロンク」（1999）
著書／「村野藤吾建築案内」（TOTO出版）2009（共著）

